

# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス

No.168  
2004.7~2004.12

- ◆速報「我が国の高等教育の将来像」セミナー開催 .....2
- ◆ハウス主催セミナー特別講演／基調講演より
  - ◇大学改革と教育研究戦略 .....徳永 保 4
  - ◇大学改革の行方と対応を考える .....小松親次郎 6
  - ◇日本の留学生交流—過去から未来へ .....光田明正 8
  - ◇中国における歴史としての「現代」.....溝口雄三 10
- ◆主催セミナーレポート .....12
  - ◇eラーニングと大学教育      ◇高等教育のボーダレス化と留学生の受け入れ
  - ◇海のロマンと日本の古代      ◇中国はいま、どこへ—中国の現在・将来・日中関係
- ◆法人ニュース .....15
  - ◇留学生会館が竣工—キャンパスに新施設が誕生
- ◆千人会通信 .....16
- ◆ご利用状況 .....18
- ◆開館40周年記念募金のお願い／募金第7回報告 .....20
- ◆館長室から .....20



2005年2月6日 「我が国の高等教育の将来像」セミナー開催



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス  
 INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.  
 〒192-0372 東京都八王子市下柚木1987-1  
 TEL: 0426-76-8511 FAX: 0426-76-1220  
<http://www.seminarhouse.or.jp>



★天野郁夫(あまの いくお)  
国立大学財務・経営センター研究部長

★日下公人(くさか きみんど)  
東京財団会長

★中嶋嶺雄(なかじま みねお)  
国際教養大学理事長・学長

先程徳永審議官からもお話がありましたように98年に21世紀の大学像について答申が出たにも拘わらず、それから6、7年しか経っていないのに何故今また「将来像」なのかという疑問は皆様方も持ちださるうと思えます。

伝統的な高等教育システムを支えてきた秩序が、規制緩和と外圧で崩れて、それをどのように再編するのかということ、文部行政の立場からも考えなければならなくなりました。私は、文科省が外圧に押されて様々な改革を進めてきたが、ここで踏みとどまって、自分たちが国の高等教育システム全体に責任を持って、どのような形でシステムを運営していくのかということについて政策的な責任を表明したというふうな受け止めをしています。

この答申の読み方ですが、研究者の立場からしますと、キーワードが見えにくい答申ではないかと思えます。しかし、実はキーワードふうなものも込められています。①政策誘導、②機能分化、③質の保証、④ユニバーサルアクセス、⑤学士課程教育、⑥ロードマップなどが挙げられます。

私はこの答申で一番重要な部分というのは7ページの「国の今後の役割」の中の「『高等教育計画の策定と各種規制』の時代から『将来像の提示と政策誘導』の時代への移行とすることができると書かれた部分だと思えます。これは文科省の高等教育行政の大転換を意味しているわけであり、その後には国の今後の役割として、大変重要なことが五つ書かれています。特に五つ目の財政支援はまさに文科省しかできないことですから、これは政策誘導の最たるものであり、多分政策誘導は財政支援と情報提供を中心に行なわれることになるだろうと思えます。

答申を拝読した感想を申し上げます。まず、「高等」に関する説明がどこにも書いていない。18歳以上のことなどでしょうね。しかし、社会が求める「高等」教育とは何かということは、どこにも書いてない。大学が教えることが高等なのか。18歳以上の人のやるのが高等なのか。これは全く本末転倒であると思えます。

それから教育の「教」、これは今までの教育に関係してきた人たちの職業上の既得権を言っている。自分に教える資格があるかとか、自分が教えていることがこれでいいのかとかの反省がない。皆さんは教える側の都合ばかり言っているが、子供の方から考えるべし。子供の発達段階、子供の社会の都合に合わせて教えないければ、何を教えるてもダメですよ。

それから教育の「育」、育というのは良心的にやろうとすれば、元来不可能なことなんです。このレポートで言えば個性化と多様化というあたりでしょうが、具体的な話がちっとも出て来ない。個性化、多様化なんてね、スローガンですよ。大学は何をしているのか。アカデミズム？ プラグマティズム？ 私は一番大事なものは暇つぶしだと思えます。暇つぶしをしている時に人間にはwisdomが出るわけですからね。IT革命と言いますが、何がInformationだと思えますね。それはデータにしか過ぎません。一番大事なのはそれを全部集めて、そこからインテリジェンスが出て来ることです。日本にもインテリジェンスがほしい。そしてwisdomですよ。wisdomというのは教えられるんです。どこからか、閃いて来るものなんです。大学では、そういう暇を与えるというところに大きな効用があり、それこそが本当の高等教育だと思えます。

少し違ったアングルから問題提起をさせて頂きたいと思えます。一つは明治5年に文部省が出来た頃からの日本の色々な高等教育の歴史をもう少し押さえた上で書いたらいいのではないかと、今この答申づくりの中で申し上げました。

二つ目は「グランドデザイン」とか「ユニバーサルアクセス」など、如何にも21世紀の国際化時代に対応しているかに見えるんですが、もし批判するとすれば、本答申に一番欠けているのは国際的な対応だと思えます。あまり出て来ないんですね。

自分の大学の話になり恐縮ですが、秋田、しかも市内ではなく雄和町という田舎で、やり方によっては、もう東京を越えて色々なことが出来るようになって来ているわけです。今回の例を見ますと、後期日程受験者510名のうち1割しか秋田県内の受験生がいない。ですから九州とか遠い所から学生が来るんですが、それと同じことが国際的に起きている。東京を通らずに、外国からどんどんアクセスがあります。職員も英語が出来るので、ダイレクトな交渉がどんどん来るようになってきました。まさにユニバーサルアクセスの国際版が行なわれてる時に、日本の大学のシステムがどうなっているかという大きな問題があるような気がしています。

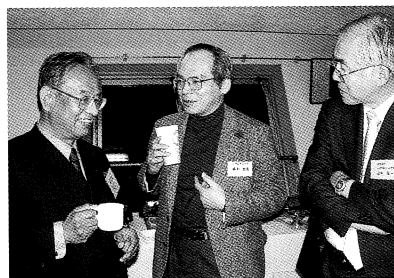
ですから、一つ重要なことは、機能分化と設置形態、同じ設置形態の中にもやり方によってすごい個性というか、違いが出て来るわけです。そんなことをこの答申がどこまで考えているかというところが私の議論として残ったところだと思います。もう一つ、公立大学法人の問題があります。

国立大学の場合は何と言っても文科省という、物凄い大きなシンクタンクを持っていて、それに負ぶさっています。公立の場合、この間まで土木行政をやっていた人たちが急に大学の中でやっている。公立大学法人化、学内運営的にはいいんですよ。学長がリーダーシップをとり、意思決定は早いですよ。しかし、何でも公立大学法人になればいいかのような幻想を持ってはいけません。そのあたりのところをもう少し正直に書いた方が良かったと、体験してみても、そんなことを感じています。(文責・編集部)

懇親会での語らい



左より荻上統一館長、徳永保審議官、天野郁夫氏



左より中嶋嶺雄理事長、森本光生氏、山本眞一氏

# 大学改革と教育研究戦略

徳永 保(たけなが たもち)  
文部科学省大臣官房審議官

私は大学に対する公財政支出を踏まえ、た上で大学運営をしていくことが大切だと思っておりますので、そのような観点から大学改革と今後の大学運営についてお話をさせて頂きたいと思っております。

皆様のお手許には資料が三つ、①今日の私の話のレジュメ、②冊子「アメリカの大学の管理運営」、③IDEの昨年の11月・12月の合併号に書いた「大学へのファンディングシステムの進展と大学革命」がお配りしてあるかと思っております。

IDEの資料のファンディングに関する表はこのためにわざわざ作ったものですが、本来であれば、文部科学省はこのような形できちんとしたマクロ的な分析をした上で、ファンディングをしなければいけないのですが、これが日本で唯一の大学に対する公的ファンディングの現時点における一番新しい統計です。是非御参考にして頂ければと思います。

## 1 これまでの大学改革の流れ

### — 大学審議会による大学改革

#### ○教育研究の高度化

レジュメの最初の方にはこれまでの大学改革の流れが色々書かれています。

まず教育研究の高度化という意味で大学院の整備をして来ました。特に国立大学の場合、大学院の博士課程を作り、或いは重点化をすると予算が増えます。国立学校の予算は授業料収入も病院収入もあります。税金による投入部分は昔から54%位でした。

IDEの資料を見ますと、平成6年位

から微減傾向であり、唯一平成元年から平成6年度にかけて予算が急増しています。これは東京大学等について大学院重点化をした効果ということですね。

#### ○大学の個性化

大学の個性化というところで一番大きいのが平成15年に行なわれた設置認可制度の改正です。それまでの量的抑制という政策を完全に放棄し、事前チェックの厳格化という方向をかなり簡素化しました。従ってこれまでは入学定員を増やすことがほとんど出来なかった大学、特に私立大学において、極めて自由に定員を設定出来ることになりました。

#### ○大学運営の活性化

大学運営の活性化については、国立大学法人制度或いは私立学校法改正をし、理事会評議委員に関する制度を整備したということが一番大きいことです。

## 2 現在の大学改革の課題

### — 中央教育審議会大学分科会での審議

#### ○大学の機能分化

現在、大学改革はどのようなことを中心にやっているかと言いますと、一つには大学の機能分化ということがあります。今回の将来像構想に関わる中央審議会の答申で、初めて明確に大学の機能分化という言葉を打ち出しました。これによって所謂研究大学、教育大学というような機能分化が進んでいくものと考えています。これまでそういったことについて、なかなか正面切って言えなかったことの一つの理由は、大学の機能分化ということについて、財政的にややアンフェアだったことが挙げられます。国・公・私立を問わず、言わば研究大学というところにはそれなりの国からの財政支出がありますが、教育大学や地域と一緒に比べていく大学という路線を選択した場合はフ

アンディングがついて来なかったのです。御承知のように国立大学については、平成14年から地域貢献という予算費目も出来ましたし、平成15年予算から国・公・私立大学を通じて特色ある教育活動を Good Practiceとして、俗に言う特色GPというプログラムが出来ましたし、或いは平成16年からは現代GPというものも出来ました。必ずしも研究大学を志向しなくても、教育なり地域貢献の路線を選択しても、それなりに文部科学省から多少のお金が来ると言うことが明確になってきました。

私共としても、大学のグランドデザインという方針の中に大学の機能分化によるきめ細かなファンディングというキャッシュフローを掲げており、具体的に予算を増やしています。例えば平成17年度の予算を見ると、国立大学の運営費交付金が総額で100億弱減っています。私立大学に関する経常費助成も、近年では一番少ない増額、30億円程度で、微増という状況です。それに対して、国・公・私立大学を通じた競争的配賦による資金が80億円になっていきます。大学の機能分化に対応する形で国・公・私立大学を通じてファンディングが一番伸びているわけです。

#### ○大学の質保証

グランドデザインには色々なことが提言されていますが、二つ目の大きなポイントは大学の質保証ということですね。これはもちろん事前・事後の公的質保証システム、設置認可と認証評価制度、特に認証評価はスタートしたばかりで、これが国としての大事なことは言うまでもありませんが、今日は別のお話をさせて頂きます。

現在我々にとって一番迫り来る大きな課題はWTOにおける高等教育サービスの自由化の問題です。即ち、アメリカで

認められた大学が日本で自由に学生を募集して教育を出来る、或いは日本で認可された大学が自由にアメリカに行つて教育を出来る、このようなことが高等教育サービスの自由化という意味です。

大学院への入学資格とか、或いは単位互換を認める制度、一方では外国で活動する大学について設置認可をする。そういう意味で、質保証が国内外に互る。そのような中で経済界、或いは政府の内閣府の行政改革部門、或いは私立大学の一部等から、今の設置認可制度は問題ではないか、いやらないのではないかなどという御意見も聞きますが、世界中で公的質保証システムがない国はないわけで、日本の大学だけが公的質保証がないから不利な取り扱いを受けるということになっては問題がありますので、設置認可とか認証評価という公的質保証システムは維持していかなければなりませんし、このことが外国との高等教育サービスの自由化をめぐる交渉の上でも大いに役立つものと考えています。

もう一つの問題は知的特区による株式会社立大学をどうするかということですね。半年位やってみて特段の問題がなければ、これをすぐ全国に展開するというのが構造特区の結論的なスタイルですが、教育というものはそんなに簡単に半年位で成果が出るものではなく、少なくとも学生を送り出してからの評価だろうと繰り返し主張しています。このような点については私立大学とも関係者とも一緒に考えて運動していきたいと思っております。

質保証は大学それ自身の主体的努力が一番大きく、その意味では大学が目的とか、習得させる知識・技術体系を明確に定めて公表し、そのことを確実に履行して行くということが質保証の一番の重要なポイントであります。そのことが大学制度を国民から信頼を得るものにしていく

一番の方法だと思っています。  
**○大学院の教育機能の實質化と国際通用性・信頼性の向上**

日本の大学院は昭和23年に学校教育法を作り、その時に課程制大学院というコンセプトを導入しました。しかしながら、それは形だけのコンセプトで、名前はあっても具体的な組織ではありませんでした。大学院の教育を實質化してきちんとしたトレーニングをしていきたいと思っています。

平成17年度予算で、魅力ある大学院教育イニシアティブという予算が30億円取れたと言いますが、これはきちんとして教育をやっている大学院を応援しようという事で予算を取ったわけです。国の政策というのは答申による理論的なり、制度改正、そしてそれを裏付けるファンドイングと三つ揃って初めて政策であり、時々三番目のファンドイングが伴わないことがあって、大変申し訳なく思っています。

### 3 今後の大学運営

#### ○大学の性質、大学の教育研究の特性

内閣府にある総合科学技術会議から「お金を出してるんだから大学の教育研究に注文つけても当たり前だろう」とみたいなことを言われて、「何を言ってるんですか」と言いました。

大学の性質は、自律的な運営の下に、高度の教育研究を行い、独占的に学位を授与する、このたった3点の極めてシンプルな定義です。大事なことはこの3点のうちどれ一つ欠けても大学ではないということ。これはポロニーヤ大学、パリ大学以来、或いはドイツ圏でいうとプラハ大学以来、世界的に、歴史的に確立されてきたコンセプトであり、このよくなものを日本の国だけで、これはおか

しいとか、あれがおかしいとか、大学の自治なんか邪魔だとか言ったところで世界に通用しません。

大学の教育研究の特性は教員個人の興味関心による研究とその成果に基づく教育を、自律的な運営の下で行なうものです。あくまでも教員個人の興味関心に基づく自由な研究というのが、大学における教育研究の本質、特質である。このことを全く理解してない向きもあるのです。例えば重点何分野というものを設けて、その重点何分野にしかお金を出さないというような外部の機関もありません。世界の人類史上の大発見大発明というのは大抵個人の興味関心に基づく研究です。例えば、1900年の初めにトムソンが電子線を発見しました。別にトムソンは電子線を発見しようと思っただけで、発見したわけではありません。ただた当射線が出てくるのが面白くて、放射線をどういう角度で計測したらいいかということをやっているのが面白くて、放射線を出して、それが1950年位になって電子機械工業が発達して、やっと役に立ったわけです。往々にしてプロジェクト研究というのは、2、3年先で必要なの、役に立つものを発見させると言いますが、そんなもので大発見大発見が出来るわけありません。そんなことでは大体つまらないマージナルな研究しか出来ません。

一見非効率的に見えますが、中長期的、20年、30年、或いは50年、100年という単位で言いますと、大学の教員個人の興味関心に基づく研究の方がずっと効果的に、或いは効率的に人類の知的な増進に役立つということを我々は経験的に悟れば一番効果的で効率的な機関だと悟ったからこそ、世界中に大学制度が普及

して発展をしているわけです。是非そのことについては自信を持って頂ければと思います。

#### ○国立大学法人化の意義

国立大学法人というのは、財政自律性の増大であり、国立大学法人と独立行政法人、独法というは全く似て非なるものではありません。国立大学は決して独法化してはなりません。独立行政法人というのは政府の各行政部門の企画部門だけを文科省に残して実施部門をアウトソーシングしたもので、言わば企画をしないもの、頭がついてないわけです。それに対して国立大学法人というのは、元々大学の自治があるわけで、自分で考える企画機能つき、頭つきの事業自主法人で、中期計画、中期目標の策定の仕方も違ってきます。評価の仕方も全然違ってきます。独立行政法人というのはその見直しがあると、廃止縮小民営化ということしかないわけです。大学人自ら独法化などと言っています。それは、滅亡につながるのです。是非、国立大学は国立大学法人化したのであって、独法化したのではないということを確認して頂ければと思います。

国立大学法人の財政上の責任と制約  
 今、学生も簡単には集まらなくなっている状況の中で、財政運営の観点から大学運営システムの改革、戦略的な大学運営を可能とする資源配分決定プロセスの確立、より透明性の高い学内資源配分の追及ということが必要です。私は役人ですから、要求・査定・調整方式というものが必要ではないかと思っており、大学伝統の委員会方式コンセンサスによる意思決定プロセスというものと、言わば行政的な要求・査定・調整による意思決定プロセスというものをどう調和させていくかということが大きな課題だと思っています。

特に総合大学の場合は部局別のリソースアロケーションというのが大変大事です。更には教育研究戦略と財政戦略の一体化ということが必要です。各省を通じて競争的資金が増えていきますから、是非大学の中で教育研究戦略を考えて頂き、国のファンドイングの傾向も踏まえて財政戦略を考えて頂きたいと思っています。

その次に実証的なコストと財務内容の分析に基づく財政措置ということが必要です。大学の部局というものを資源配分管理組織、また単位としても一回考え直すことが必要ではないかと思えます。そうしないと大学全体としてコストアロケーションするとか、リソースアロケーションすることが出来なくなることになります。そういうことで、もう1回部局ということを考え、再構築して、本部と部局の関係、責任権限関係を明確化するということが必要だと思います。どこまでを本部が決めるか、どこまでを部局が決めるのか、こういったことが重要です。

○自律的な財政会計制度の設計  
 国立大学の場合で言いますと、法人化をしたけれど、現時点ではほとんど国立大学は国立大学のメリットを活かすような体制になっていません。本当の意味は国の財政統制から離れた所で実質的に自らの財政自律性を確立することですが、皆さんそこまでまだ準備の手が回ってないという状況です。まだ多くの国立大学では予算費目を謝金とか出張費とか旅費とか公費とかいうふうに分けています。もう法人なので、そんなことをしなくていいわけです。

最後に、事務組織の見直しと事務関係職員の専門職化が必要であることを強調しておきたいと思えます。

(2005年1月22日、第11回大学職員セミナー特別講演より、文責・編集部)

# 大学改革の行方と

## 対応を考える

個性の輝きにに向けて

小松親次郎（こまつ しのぶ）

文部科学省高等教育局大学振興課長

昨日から今日にかけて熱心に議論や仲間作りをされたと伺い、大変敬服しています。萩上先生が、昨日は天気がよくて、満月を見ながら議論されたとおっしゃっていました。実は私の方も、昨夜は同じ満月を見ながら別なところで大学改革をどうするかという議論をしていました。

### 1 大学改革の全体的な流れと到達点を考える

#### (1) 臨教審と大学審議会の提唱

大学改革というのは、勿論明治に大学が出来て以来ずっと色々なことが行なわれてきたわけですが、昭和60年代に日本の教育はこのままでは駄目だということ、中曽根総理の下に、これは文部科学省としてではなく、内閣総理大臣直轄という形で、臨時教育審議会というものが設けられ、そこで大学改革の議論が行なわれました。私はその時大学課にいましたが、非常に激しい議論でした。その中で、結局大学については、その専門の権威ある政策を検討する場を設けようということ、臨教審は大雑把な報告だけを出して、大学審議会を作り、そこで纏めていこうということになりました。大学審議会は昭和62年に作られました。当時は、大学審議会を作ること自体が、大学の自治が非常に侵されるようなことになるのではないかと受け止め方もあり、強行採決をしたことが非常に鮮明に記憶に残っています。

臨教審から大学審議会の提唱というの

は昭和60年代から平成10年のことですが、①高度化、②個性化、③活性化の三つのキーワードが提唱されて、国はずっとこれを追いかけてきているのです。その後ここ数年は「大学の構造改革」等の議論になっていくわけですが、基本的にはこの高度化・個性化・活性化というのが、今でも一つのメルクマールになっているのではないかと私は思っています。

平成10年に「21世紀の大学像と今後の改革方策について」という大学審議会の答申が出ました。21世紀初頭、ちょうど今頃を見て、どうするかということに答申したもので、「21世紀答申」とよく言われる節目の答申です。

①教育研究の質の向上、②教育研究システムの柔構造化、③組織運営体制の整備、④多元的な評価システムの確立の四つの理念の下、総合的かつ具体的な大学改革の方策を提示したのですが、組織運営体制の整備についてはもうこの時予想していた改革のスピードを超えています。この時は例えば国立大学の法人化とか公立大学の法人制度などは想定されていなかったのです。それから認証評価制度というのは今新しく出来ていますが、そのようなことまでは想定されていなかったというところで、先に進んでいる部分もあるわけです。

国立大学の法人化というのはよく象徴的に言われていますが、実は国・公・私を通じて、去年から今年にかけて法人制度、組織運営制度が全部見直されて、制度的には整備されたというのが、今の時点の状況です。制度は整備されたのですが、実際にはどう運用するかに掛かっているわけですね。運用こそが命という部分があるわけで、それをどのようにしていくかということは未知数であり、皆様方のご努力に掛かっているであります。

#### (2) 「大学の構造改革」等

その後、平成13年位に新しく大学の構造改革の方針というものが出てきました。これは前遠山文部大臣が就任をされた後もなくのことですが、ここでは最初三位のことが言われていたのです。①国立大学の再編・統合、②新しい「国立大学法人」への早期移行、③民間的発想の経営手法の導入、④世界最高水準の大学の育成（第三者評価による競争原理の導入）の三つです。これを見ると、非常に国立大学に重点が置かれているという印象を受けます。国立大学の学生は全体の2割位ですが、国費ということで見ると、国立大学に過半の金が運営費として流れていることからこうなるのです。平成14年8月には更に大学の質を保証する新たなシステムとして①設置認可のあり方の抜本的見直しと、②第三者評価制度の導入が重なるように出てきています。

この二つを合わせて平成13、14、15年あたりから文科省は外に向かって「競争的環境の中で個性輝く大学づくり」と「活力に富み国際競争力のある大学づくり」がこれからの課題だと説明をしています。大学の構造改革の3番目の「世界水準の大学を作る」ということについては、資料「国・公・私立大学を通じた大学教育改革の支援」をご覧ください。

国家財政の大学に対する支援の仕組みとは、従来基本的には設置者別にお金が出る、経常的な財政を支援するという仕組みだったわけですね。国立学校で言えば特別会計、私学で言えば私学助成、そして地方は地方公共団体が出すので、地方交付税で措置をするという形になっていました。

これ以外は個人補助になります。個人補助というのは学生さんには奨学金という形で、教員の皆さんには科学研究費というような形で出るといことです。機関の運営費に設置者別にお金を出すか、

或いは個人にお金を出すか、大きく分けると、複雑な仕組みでもその二つから成り立っているわけです。

社会に役に立つことはいいいことだからお金を下さい、と我々は言うのですが、財務省といつも闘いになるのです。いいことを推進するのはいいいが、お金を下さずに推進出来ればもったいい、と言われるわけです。

色々綱引きをするわけですが、そこに新しいものとして出てきたのが「国・公・私立を通じ、自主自律を尊重したプロジェクト支援の強化」という考えです。これをやりたいということも挙げてもらって、その中で建設的に競争していくということですね。

一般的に主題を定めずにやっていくのを我々は特色G P（特色ある大学教育支援プログラム）と呼んで、これは大学基準協会に事務をやって頂いています。去年始まり、80件ほど採用しました。

いくつか主題を設定して行なう現代G P（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）の方は今年始まりました。

両方とも大学の先生方を中心に審査をして頂いています。このようなプログラムを取り入れることによって、大学の競争的環境を作り出していることもあり、財政支援そのものを、もう少し立体的な議論にしたいという狙いがあるわけです。

もう一つ、21世紀COEプログラムがあります。これは一昨年から始まっており、250件弱のものも採られています。事例集などの資料もお配りしています。事例集などの資料も出されるだけ迅速に情報を流していますので、是非御利用頂きたいと思っています。

これらの辺のプログラムは色々な使い方が出来ると思いますので、単に国への応募の手順とかそういうことではなく、事務官としての提案の中の一つの手に加えて頂くことも出来ると思います。

事前チェックから事後チェックへの移行の話に触れさせて頂きます。

大学基準協会の会長をしてられる清成忠男先生にこの間伺いましたが、先生の法政大学では、設置認可が緩み、自由になったということは自分の大学にとつてどのような意味を持つかということ、学内で色々検討したそうです。その結果、これは楽になって自由になるのではなく、大学を弱体化する怖れがあるということになったそうです。「事後評価」が育つには時間がかかるだろう。そうすると今やらかならなければいけないことは、学内設置審のようなものを作り、外部の人も入れて、大丈夫かということをチェックし、強化しなければならぬ。そう考えて、そのような制度を入れることにしました、と仰っていました。

## 2 大学機能の基本(II教育の展開)の在り方について考える

このような膨大な流れの中で、大学機能の基本というのは、私は教育の展開だと思っています。教育と研究と社会貢献の三つの機能があると言いますが、研究も社会貢献も基本は教育の機能が充実していなければうまくいかないと思います。

### ○教育課程の多彩化と充実の進展

その教育ということについては設置基準の色々な改正があったとか、様々な話題があると思います。資料を御覧頂くと平成6年度との比較が多いのですが、それは6年以前の資料が我々にはないからです。つまりここに掲げられているような項目のデータを取ろうという意識が薄かったということですね。カリキュラム改革、情報教育や外国語教育、高校での履修状況への配慮、ボランティア活動を取り入れた授業科目等の開設状況、シラバスの作成状況、学生による授業評価の実

施状況、少人数教育等々、どれもこれも伸びていることは間違いありません。自分の大学と比較なさってみてください。

### ○進む大学の開放・社会との連携

更には学生の多様化ということ、特に社会人の受け入れに関係するものがどうなっているかということに注目して頂きたいと思っています。最後に大学院関係の資料がついていますが、各大学で今実情が違うと思うのですが、どのようにバランスを取っているかということを見て下さい。教育課程は多彩化し充実して、ある程度進展をしていますが、さて、今のままで充分かということですね。

### ○動く大学院教育の位置付け

大学院というのは数万から、10年そこそこの20何万になっています。1学年の世代で言うと今大体3%位が大学院に行きます。日本の昭和20年代前半の学部レベルでの大学への進学率は5%程度でしたから、言ってみれば高等教育の爆発は戦前から少しずつ始まっていて、戦争中は戦費のために少し抑えられていたかも知れませんが、その戦争の少し前くらいの学部教育レベル、旧制高校に行く位の人たちが今大学院に行っているということですので、その意味では終戦直後の大学そのものと同じような部分に大学院が来ているということですね。

短期大学で仕事をしていたら、方々は一瞬それは関係ないと思われるかも知れませんが、短期大学を出られた方がその後どう進まれるかという中に、色々な形で将来繋がっていく人が出て来ますし、いろいろと連携していくものもあると思いますので、大学院というものを見落とさないようにしてほしいと思います。

### 3 知識基盤社会の大学を取り巻く

#### 環境を幅広く考える

最後に同じ事務員仲間としてこの機会

に、自分が仕事の中で足りないと思いい、しかし是非必要だと思っていることを申し上げたいと思います。

### ○初等中等教育の動向は？

今色々言われていますが、本当の姿はどうなっているかということ、是非、学んで頂きたい。私自身が学ぶ必要を感じていることでもあります。資料「高校改革の流れ」を見て頂くと、総合学科という新しいタイプの高校や単位制高校がこんなに増えているとか、高・大連携がこんなに進んでいる、高校でのインターンシップがこんなに多くなっている、というように様相が大きく変わってきていることが分かります。高校制度自体の現代化が進展している中で、大学や短大だということですね。

### ○「1条学校」以外の学校の動向は？

専修学校を、昭和63年度、平成15年度の比較で見ると6091校から8430校に増えていきます。少子化の中での増です。どこが増しているかということ、就業年限別に見て頂くと分かります。1年から2年以内は1690校が1241校に減っています。しかし2年から3年というところが3312校から5047校、3年以上が1089校から2142校と、大幅に増えています。専修学校のカリキュラムもチャンスがあったら、インターネット等でご覧になってみて下さい。大学や短大とは随分違いますが、みっちりやっているとということですね。

### ○刻まれていく大学の歴史の中で、今、自分はどこに？

資料を見て頂くと分かるように、これまでは人口の変化に沿って高等教育計画が作られてきたわけです。18歳人口がいくらだから進学率は何%と計算して、これくらいの認可をやるというやり方です。このやり方はユニバーサル化する中で、もう出来ないと思います。

この30年の間に小学生が900万人か

ら700万人に減り、中学生が60万人減っています。塾に通っている子供は大幅に増えてきました。大学以外の教育や学習の場が増えました。つまり、魅力がなければ他に行くし、また皆がそれだけ知識を欲するようになったとも言えます。そういう中で、大学としてどのようにやっていくかということを考えていく必要があります。

資料の「大学の史的展開」を見て下さい。大学は千年前からあります。ポロニーヤ大学の時代からあります。ドイツの大学はじめて出来た14世紀まで200年以上かかっています。日本の東大が出来てからまだ100年余りしか経っていません。一番若い欧米の大学はアメリカですが、ハーバードが16世紀に出来、ヨーロッパの州立大学が出来るまで200年あります。大学とはそういう長期的な面があります。

そしてドイツの場合を見ますと、14世紀に5大学だったものが15世紀に15大学、18世紀に30大学で、戦後爆発して360大学になっています。日本は100年間で1大学から700大学になっています。短大を入れたら1100校です。これだけの膨張をしているのは、ある意味で極めて柔軟なものを秘めているからであり、同時に、すぐく無理をしているということでもあります。そういうものは事務方の皆さんの肩にも当然かかって来るということですね。

千年の歴史の一番最後の下の線に今我々はいまいますので、背負っているものがあるかなかなか動かないのは当然のことでもあり、またそれだけ重みのあることでもあり、またそれだけ重みのあることでもあり、また簡単に流行にばかりにも乗れないという点を、改革の話ばかりしましたので、最後に一言付け加えたいと思います。

(2005年7月3日、第9回大学職員セミナー特別講演より。文責・編集部)

# 日本の留学生交流

— 過去から未来へ —

光田明正 (あつたあきまさ)  
長崎外国語大学・短期大学学長

私が文部省の留学生課長に就任したのが1977年である。当時の留学生数は5千人に満たなかった。今は10万人を超える。今日は、この間、一緒に交流事業に力を尽くした方々が多く見えている。中国大使館からも胡志平一等書記官が見えている。10万人のうち圧倒的多数は中国からの留学生である。

## 1 中国からの留学生

中国では、70年代後半、開放政策が始まり、78年に先進諸国に留学生を多数送る政策が決まった。英米独仏とともに、日本にも送りたいと申し出がきた。この中国政府の留学生政策は多くの際立った特色がある。

第一に中国の国家的事業であった。日本も政府、大学、民間が一体となって国家事業として対応した。

中国に対する総合的反応が「協力すべし」ということであった。国立大学長会議でも、積極論が圧倒的であり、公立大学も、多くの私学も熱心であった。日本の文化は中国に負うところ大という認識が、無意識に全関係者にあったのである。文化の歴史的紐帯が感じられる現象であった。

また中国の担当者が謙虚で、違う制度、社会的雰囲気を理解しようと努めた。日本の担当者も柔軟に対応し、また中国の事情を学ぼうとした。この態度がないと、成功はしなかったであろう。日中は多くの漢語を共有するが、反面、それが障害となることもある。例えば、当初、中国

では「研究生」と言うと、日本の正規の「大学院生」を意味し、日本では「研究生」と言うと、学位を取得するための正規の課程学生ではないということをして、双方が理解するのに時間を要したのである。

最も重要なのは、双方の関係者が、日中の対面交渉ではなく、アジアの未来を念頭においての共同作業という気持ちで力を出し合い、協力したことであろう。入学資格など、中国にはない概念もある。中国は一生懸命に理解しようと努め、日本は予備教育課程を考案するなど制度改変を含めての対応を図り、双方が良い方向に進むよう努めたのである。

その成果は見るべきものがあり、多くの帰国者が活躍している。

中国からの留学生は、その後、政府の事業ではなく、個人ベースに変わった。海外流出を希望する人たちが、留学生の形を取って日本に来るという現象があった一時期もあった。日本語学校のトラブルが生じた頃である。

現在は、デグリー取得を目標として来る人が多い。海外でデグリーを取れば、帰国後、よい仕事に就く機会が多く、一種の投資となるという見方である。また、経済的に子弟を進学させる力を持つ階層が都市部で増え、進学志望者が国内の大学の定員を超え、わずかの成績差で入学できなかった人々が海外留学を志向する。

前者については、日本は資金という問題を含めてどのような支援を考えるべきかが第一の問題である。後者については、どのような教育内容を迎えられるのかを真剣に考えなければならぬ。彼らは、留学後帰国し活躍しようとしているのか、単に海外で学んでそのまま海外に居続けてもいいと考えているのか、真剣に学ぶ時点であろう。

## 2 現在10余万人

今、日本にいる留学生は10万人を超える。大多数は中国から来ている。次いで、韓国、台湾、マレーシア、タイの順である。一方国から一人、数人というのを入れると、百カ国前後の国から来ていることになるが、ほとんどがアジアからであるという現実、日本はまだ、世界各国の若人の学問のメッカとはなっていないということである。

専門を見ると、大学院では圧倒的に理工系が多い。特に中国・韓国・台湾からの学生を除くと、社会科学、人文科学の学生は殆どいない。これは、世界の日本の学問を見る目の反映と言えよう。

留学生をもっと迎えて、日本を理解してもらいたい、もっと多くの各国の若人に日本で学んで欲しいという感覚は日増しに強くなってきている。社会的サポートは、70年代から見ると、驚異的なほど強くなっている。多くの奨学財団などが誕生した。宿舍の整備も進んだ。

しかし、日本の経済力、福祉の水準は、世界的に高いかどうかは問題として残る。東京や大阪など大都会の「住」の条件は、大変厳しいと言えよう。

この点から考えても、日本からアメリカに学びに行く方が順応しやすく、アメリカから日本に学びに来る方が苦勞があるということが分かる。

念願の「留学生10万人計画」は達成されたが、その増分は殆ど中国からである。全体で見ても、中・韓・台からの受け入れを除くと、国数こそ多けれ、留学生数は少ない。この点を冷静に熟慮する必要があろう。

ここ四半世紀の留学生交流の動きは示唆に富んでいる。特に上記の日中留学生交流は多くのことを学ぶことが出来る。以下に、日本の留学生交流の歴史を顧み、何が真の問題点であるかを探ろう。

## 3 留学交流と文明

留学生の交流なくして、人類の文明は発展し得なかった。日本の文化の発展は、遣新羅使、遣唐使なくしてはあり得なかった。幕末、明治期の海外留学なくしては、「文明開化」は成立し得なかった。フルブライト留学により戦後日本の科学がどれほど進展したか計り知れない。

全世界的に見ると、シルクロードによる交流も一種の留学生交流である。三蔵法師の留学が、東アジアに齎した影響は計り知れない。

## 4 グローバル化時代を迎えて

現代はグローバル化時代と言われる。今までと異なった意味で留学生交流は重みを増して来ている。

上記の交流は国際的交流であった。自国の存立を当然の前提とし、それに益する文物の学習を目的とすればよかった。建国のために、或いは国の更なる発展のために人々は派遣され、学んだ。

しかし今や「国際化」を通り越し、「グローバル化」を言う。グローバル化は国の独自性を乗り換え、全地球的な基準が発生しているという見方、或いはそのようなスタンダードを創造すべきであるという主張である。国益という立場との相克を考える時代である。

別の面から見れば、個別の独自性のある文化と強力な西欧文明の対峙である。「グローバル化」の妥当性、それにいかに対応するかを考えると大変重要になって来ている。それを考えるには、留学生の交流が一番有効であるということになる。

## 5 派遣か交流か

日本は歴史的に交流というより、派遣により学習を重ねてきた。遣唐使時代、日本は貪欲に学んで、大和文化をより豊かにした。大和文化の保持こそねらい、唐文明への同化を図ったのではない。

従って、極めて強い民族的意識のもと



で、撰取する文物の取捨選択が行われて  
いる。

16世紀の欧米人の来訪は、新しい文明  
を齎したが、留学生を多数派遣して学ぶ  
という程のインパクトはなかった。その  
後、鎖国体制に入った。鎖国を実施し得  
たのも排斥する力があつたからだと言え  
る。

## 6 文明への希求

幕末・明治維新期は、また文明の力に  
落差を見出した時期でもある。嘗て長安  
に赴いたが如く、ベルリン、ニューヨー  
ク、ロンドンに新しい文明を吸収しに赴  
く。開国後すぐの厳しい財政のもと、ど  
んどん留学生を派遣したのである。そ  
後の日本近代化の発展を見ると正しい先  
行投資であつたと言える。

遣唐使も文部省派遣の欧米への留学生  
も、民族に必要な文明の輸入作業であつ  
た。先進文明への希求である。

## 7 受け入れへの流れ

日本が留学生を迎えるようになるのは、  
日清戦争により、世界、特にアジアの  
国々に衝撃を与えてからである。日本が  
国家として主体的に招いたのではないが、  
中国などから多くの留学生が来た。二千  
年の歴史の上で初めてのことである。し  
かし、流れの主流は、やはり日本から欧  
米へ留学する方向であつた。

ところが、30年代後半になると、様相  
が変わつた。ドイツ、イタリアとは同盟  
したが、「先進諸国」の中の英・米とは41  
年に戦い始めた。それは日本が科学技術  
や軍力において「先進諸国」の一員にな  
つたという発想に基づいている。

そのような全体の流れの中で、南方特  
別留学生制度が発足した。先進文明国の  
日本が東南アジアの青年を教育するとい  
う発想である。昭和18年と19年に東南ア  
ジアからそれぞれ100名の留学生を迎

えた。また、当時の「満州国」、「中華民  
国」からも迎えた。

この時代の留学生受け入れは、日本が  
国家として積極的に主導的に留学生を招  
致した歴史上初めての事業である。

## 8 南方特別留学生の特色

第一に、これは日本の国家的事業であ  
つた。東南アジアでエリートを選別し、  
招致を図つた。経済面での厚遇があり、  
国を挙げての明示的な歓迎があつた。日  
本側も、留学生たちも、将来の国家の独  
立、建設を勉学の目標とした。

日本は敗戦となつたが、元留学生たち  
はそれぞれの国の独立に当たつて重要な  
役割を果たした。77年には元日本留学生  
協議会 (ASEAN Council of Japan Alumni)  
を発足させた。

## 9 敗戦

大戦終焉後、フルブライト奨学金が創  
設され、アメリカは世界中から留学生を  
招致した。第二次大戦前、ベルリンが担  
つていた医学、理工学、音楽などの指導  
的地位もアメリカに移り、全世界の人々  
にとつてアメリカが学問上のメッカとな  
つた。

## 10 国費留学生制度の創設

52年に独立が回復し、54年に「国費留  
学生制度」が発足した。  
日本の大学など、まだ外国に情報が伝  
わっていない時期で、文部省が大学配置  
をした。多額の奨学金を用意したが、留  
学生の世話には有志に頼らざるを得なかつ  
た。敗戦後の経済的疲弊の中で当時とし  
ては破格の設備を備えた留学生会館が駒  
場に建設された。

## 11 発展と成果

その後日本は経済的な復興を成し遂げ、  
やがて政治経済的には先進諸国首脳会議

のメンバーにもなる。芸術や科学やスポ  
ーツの面でも活躍がみられるようになる  
につれ、留学生受け入れも進展してきた。  
国費の留学生招致が果たした牽引の役  
割は大きかった。その後、上記の中国か  
らの「政府派遣」の留学生が来る。そし  
てマレーシア、タイ、インドネシアの政  
府派遣の学生が来るようになる。こうし  
て今日の留学生10万人となつたのである。

## 12 欧米からの留学生は増えるか

先に触れた、中国、韓国、台湾からの  
留学生数を10万人から引くと、他は国数  
は多いが、学生総数は多くないという問  
題がある。欧米から普遍的に多数の留  
学生が日本に来る日はあるかという命題で  
ある。

大学というのは、世界中の人たちを惹  
きつけることが出来る学術水準のものを  
持つところを言ふとすれば、留学生交流  
の本質的問題は何であるか自ずと明らか  
になる。

## 13 大学生の交流と青年交流

現時点での日本の教育水準では、世界  
から普遍的に留学生が来ることは期待し  
難い。中国、韓国、台湾それに東南アジ  
ア諸国から来る学生がいるというのは、  
これらの地域が日本に敬意を示してくれ  
ていることを物語っている。それに応ず  
るものを提供すべきであろう。

しかし、大学での学問のみが人類の営  
みの全部ではない。大学と平行して様々  
な青年交流を図る努力も国として必要で  
ある。多様な学習分野、学習形態がある  
ことを大学人も認識すべきであろう。

留学生交流を、広く人的交流の一側面  
として捉えれば、日本の他の国にない文  
化が世界に提示されるようになるのでは  
ないか。

自らが交流の主体となるように努力す  
ると同時に、例えば日本画の修復を学び

たい、柔道を学びたいというような世界  
の青年の日本文化への憧憬をどのように  
育てるかを考えるのも、そうして手助け  
するのも、最高学府としての責務と考  
えてみようではないか。

## 14 総合的国力の養成

西欧の模倣ではなく、独自のものを持  
ち、尊敬されるような国づくりを考える  
ようになる必要がある。生活環境を含め、  
社会全体が尊敬を受けるに足るようにな  
らねばならない。

特にグローバル化が唱えられる今日、  
独自のものを強く自分で認識し、それを  
他に理解してもらおうよう努力をせねばな  
らない。その努力を怠る人々は、大きな  
強力な文明の前、2級市民としての道し  
か残されないであろう。

留学生交流は、行きて学び、迎えて導  
くと同時に、ともどもに学び、異なる伝  
統文化の共存を図る、唯一の方途である。

## 15 おわりに—真の問題点

東京が8世紀の長安、19世紀のベルリ  
ン、20世紀のボストンやプリンストン等  
になれるかどうか。日本語が英語や中国  
語と比肩できる力を持つようになれるか  
どうか。日本語により考えられたシステ  
ム、哲学、科学理論の創造が多く出るか。  
もし答えが「YES」であれば、留学生  
は自ずとやってくる。答えが「NO」で  
あれば、いかに奨学金の用意をしても希  
望は持てない。

一つの世界 (Globalization) を迎える今  
日、日本人にとって大きな、重要な、課  
題である。

(2004年10月29日、第10回大学職員セ  
ミナー基調講演より、全文は当ハウスの  
ホームページに掲載、要約・編集部)



しかし、よく考えてみると、じゃ、その前の古い時代は一体何だったの、ということになるんですね。連続はないの、というわけですね。

分かり易く結論だけ言うと、このアヘン戦争の始まりが中国の「近代」の始まりだという考え方は1930年代に中国共産党の理論的討論の中から生まれてきたのです。それまではそういう考え方はありませんでした。「西方東漸」とか「西学東漸」とか言っていたんです。段々そうなるという「漸」です。アヘン戦争から「近代」が始まるという考え方はその頃はありませんでした。アヘン戦争をそれ程重視していなかった。それが、中国革命を起こすときに、一番必要な問題は何かということになって、中国が半植民地、半封建的な状態であるという認識を持つべきだということになったんです。この分析と討論は1920年代から約10年かかっています。そうして1940年代に中国共産党の公式見解になったわけです。

この考え方が1949年以降日本にも伝わって日本の歴史学者もそれに同意して、日本でもアヘン戦争以降が「近代」だというふうに言われるようになりました。これがあるとき、ある骨組みから生まれた歴史の見方の例です。

### 3 「現代中国」を見る二つの視座

では、もう一つの見方とはどういうものでしょう。

中国の歴史を考えると、千年の長さで見ると必要があるということと、千年を更に区切って提にさせて下さい。千年を更に区切つてみると三百年という単位になります。宗も明も清も王朝の長さは大体三百年なんですね。そして、はつきりとその王朝の個性というものがありません。それぞれ歴史的使命を持っていると言ってもいい。そう考えると、今の中国はこれから二百年は続くなあという感じで見ることがで

きます。中国をこの三百年の大きなうねりの中で見てみると、過去に4回の変動がありました。

私はおそらく「現代」が一番大きな大動乱だと思っています。この大動乱の前のもう一つの大変動、16、17世紀の状況をちよつと見ておきましょう。16、17世紀の新しい思想潮流として①理観の転換、②君主観・政治観の転換、③里甲制的秩序の崩壊に伴う鄉村秩序の再編、④社会・風俗の開明化、⑤学問の文化と発展が挙げられます。

唐の時代までは、貴族制の上に皇帝がいました。宋代にそれが崩壊して、平民の時代になりました。官僚が民を慈しみ、教育科挙で選ばれた官僚によって秩序が作られていきました。官僚が民を慈しみ、教育科挙で選ばれた官僚によって秩序が作られたのです。明の時代は民の組織が上から作られました。ところが清の時代にになると更に進んで、民が自主的に秩序の組織化を図るようになったのです。この時期に民衆の政治参加が始まったのです。もう少し正確に言うとその時期に平民に広く儒教が広まったということです。儒教というのは道徳なんですね。法による秩序ではなく、道徳による秩序のシステムが築かれたのです。そして、例えば宗族を中心としたネットワークシステムを築いていく。このように、古代からずっと見ていくと王朝ごとの変化に気づくんです。そしてこの見方をとると、1911年の辛亥革命の持つ意味の大きさがわかってきます。なにしろ中国で二千年続いた王朝制がなくなるということは大激動ですよ。そして大激動の時には30年、40年の混乱が続くのは当たり前前で、革命の深さを物語っています。

### 4 中国の「社会主義」をどう見るか

「社会主義」に括弧がしてあるのはイデオロギーの社会主義とは違うよ、ということが言いたいわけですね。

まず、中国は日本と違って均分相統制による財産の流動性というのが宋代から三代続かずという言葉があります。貧も三代続かずという言葉があります。そういう状況の中で宗から明にかけてそういう人たちが多くなる。それを救うために作られたのが相互扶助のシステムです。中国の相互扶助は共有財産を作るという形で行なっていたんです。財産の共有、あるいは共同、共同使用、そういう形で相互扶助のシステムを清代に発達させました。そういう秩序は全体として中国人の中に相互扶助の倫理観念を非常に強く植えつけています。これが中国における社会主義が非常に影響を与えやすかった一つの理由です。中国では「共産」という言葉は全然抵抗ないんですよ。

公産と共産、中国ではちよつとした違いで、同じ言葉です。日本で公産といえは、公有財産つまり主に官有財産という意味ですね、そういう公産というものを、もう清代に充分経験していますから、社会主義になって人民公社になってもそんなに抵抗はなく、驚かなかつたわけですね。それが第一層。

第二層は儒家官僚のイデオロギーが専利、占有に反対していたのです。儒家は均を原理としていますから、弱肉強食は禽獣の道というふうな考えられていたのです。第三層としては、儒家思想における大同思想が挙げられます。思想としても哲学としても万物一体であり、皆が同じように生きていかなければならないという考え方です。一番上の第四層は皇帝が天下を統治していく場合の統治理念としての「天」の思想の味が三つあったこと。即ち、貧富を均しくする、万物その所得さしむ、民は食を以てて天と爲す、の三つです。この三つが中国の漢代から永遠と続く統治理念なんですね。この統治理念は孫文

の三民主義の中にも、社会主義の中にも充分活かされています。逆に言えば、彼らの社会主義は初めから「中国式」社会主義だということです。

最後に、「現代」というものをどう見ることになりませんが、社会主義に失敗して、資本主義を取り入れたとかそんなことじゃないですよ。先に挙げた三つの原理はこれから中国を治めて行く上で非常に大事ですが、これをどう理論化するかですね。社会主義のイデオロギーではなくて何か新しい思想の上で理論化が始まるだろうと思います。中国の中で新しい政治理念を作る動きが必ず出てくると思います。

繰り返しになりますが、中国は大体、三百年単位の波長で推移しています。最初の50、60年は大混乱、真ん中の150年の安定と発展、矛盾の発生、そして最後の100年で下降していく。しかし、次の新しい勢力がまた出て来る。私は中国のこの連続性というのはすごいと思っています。

もう一つ、文明圏としてみた場合、中国はこの三千年間大陸から動いていない。この安定性ですね。だから周りに小さい王朝ができてくるんですね。日本とか朝鮮とかベトナムとかね。余程地域が安定しているということですね。

日清戦争の時に「現代」が始まったなという狭い、あるいは浅い、歴史の見方から脱却して、深い、長い連続の中で見た場合に、この二千年の関係の中でこれからの百年間は日本と中国はどういう関係がいいかということを考えて頂きたいと思っています。また、世界の流れの中から見ただ日中関係を、長い歴史と広い視野で見て頂きたいと思っています。

(2004年12月11日第31回国際学生セミナー基調講演より、文責・編集部)

## 第41回大学教員セミナー

# eラーニングと大学教育

2004年9月4日～5日

山本 眞一（企画委員会委員長）

大学教員セミナーは、「大学教員懇談会」時代を含めると41回を数える伝統ある行事である。その41回目の会合を、昨年9月4日～5日に開催した。テーマは「eラーニングと大学教育」である。近年のIT技術の急速な進歩と情報化・グローバル化の中で関心が高まっているため、その現状を知るとともに、大学教育に及ぼす影響や効果を議論し、大学教員としてこれからの大学教育のあり方を考えるために役立てようとして設定したものである。ちなみに、ここでいうeラーニングとは、「ICTを配信の技術とし、教授者と学習者との双方向を確保した教育」のことである。予定の70名を上回る85名の参加者を得、講師の興味ある話題提供と参加者の熱心な討論があり、盛況であった。

講師は全部で5人お願いした。小笠原正明北海道大学高等教育機能開発総合センター教授には、「大学教育における道具としてのeラーニング」について話を願った。かつてはeラーニングが大学のキャンパスを一掃すると言われた時期があったが、少なくとも日本に関してはそのようにはならなかった。しかし実際には、対面授業を補う道具としてのeラーニングは深く静かに浸

透し、大学の授業の姿を確実に変えつつあるという。その例として、カリフォルニア大学バークレーにおける「入門化学」の授業では、優れた教員がIT技術を駆使して授業を行い、大規模授業の評判を良いものに変えつつあること、また、北大の「科学技術倫理」の授業では、小グループによるケーススタディーにおいて手作りのeラーニングソフトが威力を発揮しているとの紹介があった。

次に小松秀樹NTTラーニングシステムズ(株)とD事業部企画調査室長から「外側から見た大学のeラーニング」と題する講演があった。大学のeラーニングで日本の将来のために重要かつ可能性のあるのは社会人向け大学院であるが、教育の目標を実務能力養成に絞りきれない、学習目標を調査して開発するという感覚がない、などの問題があるという。もともとこれは、我が国の大学教育全般を通じる問題でもあるように思える。今後とも追求すべき検討課題ではないだろうか。

山田恒夫メディア教育開発センター教授は、eラーニングの成功のための一つの条件に、高品質なコンテンツの充足が挙げられるとし、その開発と再利用についての興味ある話があった。すでにコンテンツを蓄積するさまざまなデータベースが構築されつつあることを知って、私自身大変興味深かった。山本洋雄信州大学高等教育システムセンター教授は、信州大学で進められつつある全学eラーニング化の推進について語った。同大学では、2002年度に日本で初めての情報工学系イン

ターネット大学院を立ち上げ、毎年70名以上の社会人を受け入れている。また2004年度には共通教育を中心にeラーニング化を開始し、さらに今後は、情報工学系のインターネット大学院・大学や熟年体育大学の指導者養成のためのeラーニングを計画するなど、次々と企画を進めつつあるとのことである。

最後に、岡本薫前文化庁著作権課長（現・文部科学省スポーツ青少年局企画体育課長）から、「eラーニングと著作権」と題する講演があり、著作権はモラルではなくルールであること、国による規制ではなく私権の調整であること、またかつては一部の人々だけがこれに係わっていたところに、著作物の制作者やその使用者がデジタル機器やコンピュータ、インターネットの爆発的普及によって多くの人々に係る問題になってきたこと、などが説かれた。大学教員は著作物の制作者でもあり、また教育や研究において著作物を沢山使用するユーザーでもある。eラーニングの時代に、どのような著作権制度設計がより望ましいものなのか、いろいろ考えさせられるものがあった。

以上の講演と討論を通じて、eラーニングはこれまでの教育方法に比べて、時間的・空間的制約を大幅に克服できる有益な手段であることを再認識した。忙しい学習者にとって、いつでもどこでも勉強ができるということは大変な朗報である。本格的なeラーニング・システムを構築するためには、優れたコンテンツが必要であるだろうし、また、双方向通信に必要な便利な機器と

そのシステムを用意する必要があるだろう。コンテンツの開発やシステムの構築・維持のための人員も必要であろう。双方向通信には、単なる技術ではなく、学生の具体的質問に応じたきめ細かな対応も要求されるからである。ただ自身は、時空を超えるという原理原則に立ち返れば、もっと簡便なeラーニングを考えることも可能であるのではないかと考えている。その意味で、組織的なeラーニングの開発と並んで、教授者側からみた個人ベースのeラーニングの実践も、教育改善の一環として、大いに考えたいものである。（筑波大学教授・大学研究センター長）



第41回大学教員セミナー 講師と企画委員の先生方  
(前列右から3人目が山本眞一企画委員長)

## 第10回大学職員セミナー 高等教育のボーダレス化と 留学生の受け入れ

2004年10月29日～30日

ここ数年間、大学職員セミナーは大学改革をテーマに取り上げて来たが、今回は趣を変え、「留学生」をテーマに選んだ。1983年に策定された「留学生受け入れ10万人計画」の目標が達成され、2003年12月に答申「新たな留学生政策の展開について」留学生交流の拡大と質の向上」が発表されたことを受けてのことである。企画委員長の佐藤東洋士・桜美林大学学長を中心に企画が練られ、講師も国際色豊かな方々をお招きして、インターナショナルな雰囲気の中で、国際交流の問題を考えるセミナーとなった。

冒頭の基調講演は、「日本の留学生交流―過去から未来へ―」と題して、光田明正・長崎外国語大学学長が文部省留学生課長時代等の豊富な国際体験に基づき、歴史の「秘話」をユーモアを交えて披露して下さった。目から鱗のような話を沢山聞かせて頂いた。

続くパネルディスカッションは「留学生送り出し国の実情と日本に対する期待」のテーマの下、胡志平・中華人民共和国駐日本大使館一等書記官、アダイブ・ラーマン・マレーシア駐日本大使館参事官、益子エレン・東京財団常務理事、堀江学・日本学生支援機構留学生部次長の四氏が参加、それぞれ

20分のプレゼンテーションで基本的な考え方を述べられた後、ブルース・バートン・桜美林大学国際交流センター長の司会進行でディスカッションが行なわれた。

新潟地震直後、現地の学生を見舞った胡書記官が日本語でその体験を語った折、感極まって涙声となり、数分間会場に感動の沈黙が続いたことが印象的だった。

「留学生たちは多くの日本人に親切にして頂きました。私自身も余震の怖さを体験したこともあり、心打たれ、テレビの電話インタビューで本国の人たちにそのことを伝えました。」

夜は①中国留学生の支援、②留学生の管理(入国から出国まで)、③留学生の生活支援の3つのテーマに分かれて、分科会を行なった。

小グループによる熱心な議論の後、会場を交友館に移して懇親会が開かれた。南大沢の夜景を眺めながら、生ビールで乾杯、ネットワーク作りは夜更けまで続いた。

翌朝は分科会の議論を更に深化させた後、全体会で各分科会の報告があり、堀江学氏の司会進行で総括討論を行なった。

参加者は50人に満たなかったが、初秋にふさわしい落ち着いたよいセミナーだったとの感想を頂いた。

(文責・編集部)



ようこそ広場にて (第10回大学職員セミナー)

### 公開セミナー

## 海のロマンと日本の古代

古田武彦先生を囲んで

松本郁子(京都大学大学院)

11月13、14日の両日にわたって行われた大学セミナー・ハウス公開セミナー「海のロマンと日本の古代―古田武彦先生を囲んで―」が盛会のもとに終了した。

雨が降ることが危ぶまれたが、幸いにして爽やかな晴天に恵まれ、荻上絃一館長の開会の辞とともにセミナー第一日目がスタートした。第一セッションでは「国引き伝説と出雲王朝」とい

うテーマで古田先生にご講演いただいた後、質疑応答を行った。島根県立大学学長の宇野重昭先生や島根県隠岐島からご来聴の八幡黒曜石店店主八幡浩二さん、隠岐島町役場係長野辺一寛さん、松浜旅館の斉藤一志さん等が地元出身の方ならではの質問や問題提起をされ、大変有意義な内容であった。

今回のセミナーの主要テーマは「日本の古代」ではあるが、もとより古田先生の学問研究の興味関心は古代史にとどまるものではない。最近では「トーマス福音書」をはじめとする原始キリスト教研究にも取り組まれ、その探求の幅をますます広げておられる。そこで特別セッション「トーマス福音書についての新発見」を設け、「トーマス福音書」に関する新たな発見についてご講演いただいた。イエスの「人間」に迫る鋭い史料批判と分析、キリスト教のみならず仏教の起源にも関わる新発見の数々に会場の参加者は思わず息を呑んだ。

夕食後行われた懇親会では、長野県松本深志高校での教え子中嶋嶺雄理事長や菴谷利夫先生をはじめとして、古田先生の「弟子」を自認する荻上館長、そして「もぐり」で昭和薬科大学時代の古田先生の講義を聴講されていたという若手研究者渡辺和仁さん等が「わが師・古田武彦先生」を思う存分に語った。古田先生のお孫さんが「おじいちゃん」について語るといふ微笑ましいひとコマもあった。古田先生の「人間」に迫るには十分すぎるほど充実した会であった。

第二日目の第二セッションでは「天孫

降臨と九州王朝」、第三セッションでは「古代日本の国際交流」というテーマでそれぞれ古田先生にご講演いただいた。

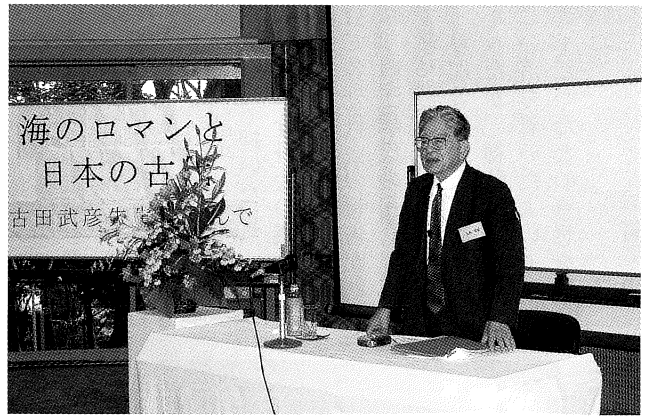
古田先生の学問の魅力は、第一に仮説のダイナミックさ、第二に理論の明確さ、第三に実証の鋭さである。今回のセミナーでもその魅力が思う存分発揮され、会場の人々は胸を躍らせながら先生の話に聞き入っていた。

荻上館長は閉会の辞として「今回のセミナーで古田説が歴史の『真実』であるとの確信をますます深めた。古田史学が日本史のスタンダードになる日が一日も早く来ることを願ってやまない。」と締めくくられ、二日間にわたって行われたセミナーが幕を閉じた。

…と思ったのだが、荻上館長の話が終わるや否や古田先生はまたまたマイクを握られ、ご来場の方々の質問に答えるためにさらにディスカッションの会を開くと言われる。四回にわたるセッションで熱弁を振るわれ、食事中にも参加者の方々の質問にひとつひとつ丁寧に答える等、二日間ほぼ休みなく話し続けたのにもかかわらず、本当に凄まじいまでのエネルギーと学問に対する情熱である。驚嘆した。古田先生はこれからもますますご自身の学問を深められ、私たちに知的興奮を与え続けて下さることだろう。

☆古田先生は、参加者から事前に寄せられたものとコーディネーターが用意したものを、併せて74の質問の全てに対して丁寧に解説して下さいました。

(URL: <http://www.seminarhouse.or.jp/kikaku/furudata20050225.htm>)参照)



疲れを見せず熱弁をふるわれる古田武彦先生

### 第31回国際学生セミナー 中国はつま、エンク — 中国の現在・将来・日中関係 — 2004年12月11日～12日

日本人学生と留学生が一堂に会して国際的なテーマにつき学習し、意見交換をする国際学生セミナーの第31回目の集いが昨年12月11日、12日の両日間催された。

この十年余りは主にグローバルイシューを取り上げられて来たが、今回はテーマを「中国」に絞った。中国専門の中兼和津次企画委員長(青山学院大学国際政治経済学部教授)を中心に企画立

案や講師の人選が行なわれ、新進気鋭の講師陣が揃った素晴らしいプログラムとなった。

先ず初日は中国思想史の大御所、溝口雄三・東京大学名誉教授による「中国における歴史としての『現代』」と題する基調講演で始まった。

続いて、分科会の講師でもある5人の先生方による短い講演があった。殆どの講師が溝口先生の講演を引用されていたのが印象的だった。講師及びテーマは次の通り。

- ① 大橋英夫・専修大学経済学部教授  
「中国経済の台頭と日中経済関係」
- ② 園田茂人・中央大学文学部教授  
「中国社会の変化とどう向き合うか」
- ③ 中居良文・学習院大学法学部教授  
「Chinese democracy in comparative perspective」
- ④ 谷垣眞理子・東京大学大学院総合文化研究科助教授  
「香港の一国二制度はどうなるか」
- ⑤ 劉傑・早稲田大学社会科学部教授  
「歴史の中の戦争、政治の中の歴史」

夜はセクシオン演習の後、図書館で餃子パーティーが開かれた。当ハウスの職員が心をこめて作った熱々の水餃子にみな大喜び。師弟、参加学生同士の激論や笑い声が深夜の森に響き渡った。

翌朝は7時半からモーニングツアー。早起きをした者の任意参加で、約2万坪の広大な敷地内を小一時間かかって散策した。

午前中はセクシオン演習の第2部をみっちりやり、特に留学生のために用意された「遠来荘の見学と茶道体験」

で一息。渡辺宿泊業務課長と有志の方々のご厚意によるもので、留学生のみならず日本人学生からも大変喜ばれた。

暦の上では初冬であったが、紅葉が最後の輝きを見せ、ハウスの取り巻く自然は赤や黄色に染まって美しかった。そんなことも含めてであろう、学生時代にもハウスを利用したという谷垣先生が「ハウスの魔法」の力で、素晴らしいセミナーとなったと午後の全体会で感想を述べて下さった。

今回18名の留学生の参加があったが、富士ゼロックス株式会社秘書室及び同小林節太郎記念基金のご援助により、参加費及び遠距離からの参加者への交通費の補助を行なうことができた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。(文責・編集部)

**2005年度教職員セミナー開催予定(開催順)**

- ★ 第12回大学職員セミナー  
2005年6月30日(木)～7月1日(金)
- ★ 第43回大学教員セミナー  
2005年9月3日(土)～4日(日)
- ★ 第13回大学職員セミナー  
2005年10月21日(金)～22日(土)
- ★ 第14回大学職員セミナー  
2006年1月20日(金)～21日(土)

# 留学生会館が竣工

キャンパスに新施設が誕生

平成17年2月15日、計画どおり留学生会館が完成しました。開館20周年記念館建設（1989年7月落成）から数えること16年。いまこのキャンパスに久しぶりに新施設が誕生しました。同館のオープンを契機にこの丘に集う学生たちはもちろんのこと、地域住民との日常的な国際交流の場を提供します。

迎えます。引き続き皆様方のご支援をお願いします。なお、同館の入居・運営等に関する業務は、新たに留学生会館課を設けて対応します。

留学生の負担をできる限り少なくし、なおかつよりよい学習環境で勉強ができるように工夫されています。個人のプライバシーを尊重しつつ、家庭的な暮らしができるように設計されているところが特徴です。

居室はベッド、エアコン、ユニットバス、机・イスなどが標準で付いていますので、留学生は来日してすぐに生活ができます。また通学の利便性を図るために自転車無料で貸与します。さらにいまや不可欠となったインターネット環境も光ケーブルを導入し、パソコンを持っていけばすぐに接続が可能です。留学生会館の概要は下表のとおりです。この4月1日から留学生を

## 留学生会館の概要

|        |                                                                        |
|--------|------------------------------------------------------------------------|
| 名 称    | 財団法人大学セミナー・ハウス留学生会館<br>The House of International Students             |
| 総延床面積  | 680.94㎡                                                                |
| 総建設費   | 134,400,000円                                                           |
| 構造・階数  | 鉄筋コンクリート3階建                                                            |
| 居室数    | 25室                                                                    |
| 居室面積   | 18.0㎡                                                                  |
| 共有スペース | セミナー室（食堂）、洗濯・乾燥室、他                                                     |
| 居室設備   | ユニットバス、エアコン、ベッド、机・イス、冷蔵庫、クローゼット、シューズボックス、カーテン、電気スタンド、インターネット接続、自動ロック、他 |
| 入居資格   | 「留学」の在留資格を有し、修学または研究のために来日し、大学セミナー・ハウス協会員校に在籍している学生及び大学院生（大学院生を優先）     |
| 入居費用   | 入居保証金：40,000円<br>個室使用料：45,000円<br>（共益費、光熱水費、インターネット接続料を含む）             |



### 平成16年度 第2回常務理事会

平成16年9月3日／大学セミナー・ハウス

【出席者】中嶋嶺雄（理事長）、荻上絃一（館長）、本江哲郎（専務理事）、宇野重昭、佐藤 保、鈴木康司

#### 【主な議題】

募金報告、予約状況、予算執行状況、留学生会館建設工事、主催セミナーの実施報告及び準備状況、留学生会館運営要項（案）、施設改修2カ年実施計画（案）、他

### 平成16年度 第3回常務理事会

平成16年11月14日／アイビーホール

【出席者】中嶋嶺雄（理事長）、荻上絃一（館長）、本江哲郎（専務理事）、宇野重昭、鈴木康司

#### 【主な議題】

募金状況、予約状況、予算執行状況、主催セミナーの実施報告及び準備状況、寄付行為改正、留学生会館運営要項（案）、他

# 会費をありがとうございました

(2004年7月~12月 敬称略)

見田宗介、井上宇市、三橋文雄、金子晃、吉田幸弘、松平文朗、黒田道雄、長浜洋一、高橋公雄、中村浩三、入江和夫、藤原鎮男、柏木恵子、川原啓美、橋本智、松島 恵、小池 滋、綿引二郎、芳野越夫、窪田富男、吉田美穂子、大熊徹、築田長世、三宅 彰、鈴木成文、原誠、稲田 拓、慶谷伸代、原島幸太郎、中山光雄、柴田 誠、加藤幹夫、太幡祐己、伊藤意智郎、仙田 哲、荒川由美子、瀬田裕司、新井勝紘、古本捷治、山西貞、栗原 裕、中山勝博、麻島昭一、佐藤 豪、米村貞蔵、村田光二、荻原洋太郎、船山信子、大澤恵美子、厚東偉介、鈴木一道、山本武彦、原田行男、岡村文子、熊田禎宣、柳下綱道、伊藤一郎、伊藤一郎、志賀 英、國岡昭夫、八田昭雄、八幡義博、宮野三郎、松本 宏、渡辺昭夫、得田保雄、羽方 純、金谷 憲、長谷川瑞穂、松瀬貞規、増田茂樹、村上陽一郎、出居 茂、沖塩莊一郎、古屋野正伍、林 勲、福島正久、市川 博、田中弥寿雄、佐藤東洋士、小和田恆、並河一道、小幡史朗、楯 吉彦、長内 了、小堀桂一郎、田中 栄、岩崎征人、岡村秀勇、高村多賀子、朽津耕三、久場嬉子、関本昌秀、東壽太郎、末松安晴、藤田淑子、奥田眞丈、桐原五十鈴、青柳清孝、松田千鶴子、谷 俊治、関口利男、横山宏、松岡八郎、安達義明、荒川幾男、小林善彦、小川信子、篠崎啓助、平澤茂一、

吉原健吾、酢屋善元、小田 滋、田村恭、高橋三郎、牧内 操、川鍋正敏、鈴木順子、福田隆義、木畑洋一、宇野重昭、久留都茂子、秋田成就、大須賀節雄、井手久登、赤木愛和、柳下 登、田村皖司、熊川 忠、戸張よし子、米満 登、正路徹也、小林澈郎、飯野利夫、山下幸夫、森田信義、伊藤玄三、松尾秀雄、田村光三、梶木隆一、滝口 亨、今井哲哉、増田義男、小松八郎、近藤 保、平野敬一、青木生子、上田和宏、有馬弥子、甲斐隆、有山正孝、松本幸一、池田 温、慶伊富長、大和政彦、澤孝一郎、横沼健雄、尾田幸雄、三浦安子、石井 明、吉田豊、外池孝雄、森田 明、石田孝夫、城謙輔、山田圭一、生山智己、栗田 寛、小西正捷、外池孝雄、徳重昌志、飯田能子、金台休、大口勇次郎、平野健一郎、青柳総太郎、小谷正博、堀井啓幸、塚本利明、田島澄江、中野斉子、上田明子、川端香男里、斎藤信房、白井克彦、三浦永光

## 会員からのメッセージ

★誕生日カードをありがとうございました。村瀬 旻  
た。  
★誕生日レター有難うございました。健康で同日を迎えられましたことに感謝して千人会費をお送りさせて頂きました。セミナーハウスのご充実とご発展を祈念致します。 三橋文雄  
★美しいカードを有難うございました。入院中の病院で78歳の誕生日を迎えま

したが、今は自宅で元気にしています。そんなわけで送金が遅れて申し訳ありませんでした。 吉田幸弘  
★お誕生日カードありがとうございました。大学セミナーハウスの益々のご発展をお祈りいたします。 松島 恵  
★お誕生日カードありがとうございました。平成16年度(2004)会費払い込みました。どうぞよろしく願います。 吉田美穂子  
★よろしくお願い申し上げます。 大熊 徹  
★遅ればせながら送らせていただきます。暑さきびしき折、皆様の御健康をお祈りいたします。 慶谷伸代  
★20代の学生時代にゼミ合宿で利用したことがきっかけで千人会員になりました。それが、それから三十有余年経ち、無事に60歳を迎えることができました。ゼミ員から祝ってもらって改めて年齢を実感しているところです。今年度はAにします。 新井勝紘  
★誕生日から一カ月遅くなり、申し訳ございません。 山西 貞  
★ご案内、有難うございました。大学セミナーハウスの発展を祈念しております。 栗原 裕  
★お誕生日カード有難うございました。元気に75歳を迎えました。 米村貞蔵  
★これからもよろしく願います。 厚東偉介  
★誕生日カードを頂き有難うございました。82歳を無事元気に過すことが出来感謝して居ります。異常な残暑が続いて居ります。職員ご一同お身体をご自

愛下され、ハウスの益々の充実発展されますこと、ご祈念申し上げます。 柳下綱道  
★何とか元気にしております。セミナーハウスのご発展を祈り上げます。 志賀 英  
★誕生日カードを有難うございました。お陰様で74歳を無事迎えることができました。 宮野三郎  
★今、学芸員の資格を取る為に勉強しています。これまで共同セミナーに参加したことが知識の幅を持たせることに役立っています。 得田保雄  
★短期在外研究に出かけており、期日に遅れ申し訳ございません。貴会からカード頂くことで自分の年齢を確認するこの頃です。 長内 了  
★ささやかですが御役に立てば幸いです。 岡村秀勇  
★8月9月は、世界数学教育会議・Denmark、日中数学会議・中国湖南省、故Jions追悼の数値解析会議・北京と続き、その為大変遅くなりました。お詫び申し上げます。 藤田淑子  
★いろいろな行事が行われて会費の送金がおくれて申し訳ありませんでした。74歳になりましたが、幸い健康に恵まれて、いくつかの仕事が続いております。 谷 俊治  
★誕生日カードありがとうございました。厚く御礼申し上げます。八十歳を迎えました。相変わらず好きな学問をしながらまた趣味を楽しみながら暮らしております。大学セミナーハウスも種々な活動をされており、御苦勞様でござ



います。一層の御発展を期待申し上げます。草々。 松岡八郎

★今年の酷暑、皆様にはお変わりなく御活躍の事と存じます。私事只今、スウェーデンの王立工科大学の客員研究員として、高齢者の住環境の調査研究をおこなっています。現役から開放されて一年間の予定で、ストックホルムにおりますので、払い込みがおそくなり、失礼いたしました。 小川信子

★遅くなりまして恐縮です。今年は5000円振り込ませていただきます。かつて国際学生セミナーにて談論風発したのが今のキャリアの原点です。今の学生も「まんざら捨てたものではない」との世評がもつぱらです。時にまざって議論したいものです。 吉原健吾

★よきお働きを感謝しております。

★珍しい写真、ありがとうございます。 高橋三郎

★美しいカードをありがとうございます。 鈴木順子

★千人会のサポートがいつまでも続くように祈っています。 宇野重昭

★小生、聴力のほとんどを失い、腰痛で行動の自由がありませんので今回をもって、退会させて頂きます。長い間、有難うございました。 秋田成就

★74歳になり、2006年3月に定年退職しますので、この会費を最後にします。有難うございました。 赤木愛和

★誕生日を記念する美しいカードありがとうございます。現在、若き日の英語グループをその主要メンバーと50年

ぶりに再編成し、2001年より月2回会合を開き、英語を使用しての発表会、話し合いを楽しんでいます。

★誕生日のお祝いの言葉、ありがとうございます。昨年は四つ葉のクローバーを発見したとのことお知らせくださいました。今年も珍しい卵苜を発見したとので、色鮮やかな絵葉書にしてくださいました。そのお心遣いに心

和む嬉しさを感じました。 熊川 忠

★珍しい卵苜の写真が入ったバースデーカードを頂きました。ありがとうございます。

★毎年、誕生日に合わせてカードをお送りくださりありがとうございます。時々会費の送金を忘れたこともありましたが、恐縮しております。私、去る3月31日をもって退職し、年金生活に入りました。つきましては、今回の送金を最後に、千人会を退会したいと思います。よろしくお取り計らいください。なお、末筆になりましたが、貴

セミナーハウスの一層の発展を祈念しております。 正路徹也

★今年も珍しい苜の写真の誕生日カード有難うございました。七十歳半ばはどうみても老人に違いありませんが、「提一燈、行暗夜、勿憂暗夜、只頼一燈」という古人の言葉に従って許された時間、短くならとも勉強を続けたいと思っております。

★千人会費僅かですが、お送りします。セミナーハウスの発展をお祈り致します。

森田信義

★16年3月末をもって法政大学を定年退職致しました。その間、大学セミナーハウスにも幾度かお世話になりました。事、有難うございました。これからも若干大学院関係その他の仕事がありますので、似た生活が続きます。

★関東だけでなく、東海地方の各大学のゼミナールが利用できるセミナーハウスにしてゆきたいと考えています。

★81歳になりました。 松尾秀雄

★丁度満80歳という年節の区切りが来ましたので、これを以て千人会を退会させていただきます。後、御発展を祈っています。 小松八郎

★ハウスが常に新しい活動を進めておられることに感動しております。私は人生わずかな持ち時間をやり残した仕事に日々追われています。 青木生子

★卵苜の写真見惚れました。毎年カードを頂いて嬉しいですよ。

★おかげで元気にしております。 創価大学 甲斐 隆

★皆々様の御平安とセミナーハウスの御活動がいよいよ活発になりますようお祈り申し上げます。 慶伊富長

★大学を定年退職後、インドの研究機関で研究をつづけています。御発展を祈ります。 三浦安子

★父が「還暦を祝う会」で着用した赤いチャンチャンコを着て、私も今年12月に満60歳を祝いました。大学共同セミナーの仲間にお困り。 小西正捷

飯田能子

★ご隆昌を念じます。 金台依

★お誕生日カード、有難うございます。 青柳総太郎

★お陰様で健康に過しております。秋には家族でセミナーハウスを訪れました。 小谷正博

★バースデーカードを有難うございました。1年がとて早く感じられます。来年春からセミナーハウスに近い県の大学に異(移動)します。50歳を目前にして(いち)からのスタートです。学生ともどもよろしくご指導ください。

★カードを有難うございました。 堀井啓幸

★一層のご発展を祈ります。小生は昨年米壽を迎えました。 上田明子

斎藤信房

寄贈図書(2004年7月~12月)

『聖書/新共同訳和英』

日本国際ギデオ協会殿

『我ら皆、山の民』

高石道明殿

『新しい日中関係への提言—環境・新人文主義・共生—』

桜美林大学殿

『ペーター・ハントケの演劇—劇作品から見たハントケ像—』

学習院大学殿

『工学院大学研究報告97号』『工学院大学研究論叢42—1号』

工学院大学殿

植樹

蠟梅一株 法政大学漆原和子ゼミ一同殿  
夏みかん二株 マレーシア・マラ教育財団殿

# ご利用状況

2004年7月～12月  
 \* Ⅱ 同月2回利用  
 日帰りはグループ数のみ  
 (延べ人数には日帰りの  
 利用者は含まず)

(株)イースト  
 (株)社員教育研究所  
 千葉商科大学体育会本部  
 東京大学分子細胞生物学研究所  
 立教大学教授  
 国際基督教大学デイベータインク部  
 埼玉大学教授  
 東京都立南多摩高等学校帰国生徒部  
 町田新体操クラブ  
 現代と経済  
 佼成学園高等学校  
 明海大学助教授  
 アジア教育史学会  
 \* 共立女子大学教授  
 生物物理若手の会  
 神奈川県立相模大野高等学校演劇部  
 八王子リトルリーグ野球協会  
 先住民族と平和セミナー  
 スリーアイワークショップ  
 学習サークルたんぽぽ会  
 山形大学工学部電気電子工学科中川研  
 究室  
 関東学院大学哲学研究会  
 専修大学名誉教授  
 東京造形大学教授  
 秀明大学助教授  
 マレーシア留学生  
 国立音楽大学フィガロ  
 栃木県立宇都宮高等学校  
 浅川小年少女合唱団  
 \* ガイヒーリージャパン  
 八王子なぎなた連盟  
 カウンセリング学習者のためのエンカ  
 ウンターグループ  
 東京神学大学公開夜間神学講座  
 国立音楽大学  
 八王子市立打越中学校ソフトテニス部  
 有志  
 帝国と思想研究会  
 明神フェニックスFC

駒澤大学谷口グループ  
 高橋聖書集会ヨシユア会  
 東京若枝教会稲城伝道所  
 文学教育研究者集団  
 東京武蔵野福音自由教会社会人青年会  
 (個人利用)  
 筑波大学  
 渡辺ゆかり  
 ■ 8月 (85グループ、延4436人)  
 早稲田大学劇団コンツェルト  
 中央大学学生相談室  
 日本女子大学教授  
 住澤博紀  
 早稲田大学SANEテニスクラブ  
 早稲田大学(Sake-Road)社会と労働  
 上田紀行  
 中央大学教育学サブゼミナール  
 佐藤康男  
 東京大学財政学研究会  
 東京工業大学村田研究室  
 一橋大学教授  
 古澤ゆう子  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学合唱団  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

和光大学助教授  
 福井大学  
 教諭セミナー  
 文学教育研究者集団  
 相模原キリスト教会  
 AITC  
 大久保集会  
 日輪グループ  
 日本山岳会科学委員会  
 東京都多摩教育事務所西多摩支所  
 (社)国際商事法研究所  
 聖書研究会  
 ここもり・ヘミシンク  
 授業研究会の会  
 東京韓国キリスト教会  
 日本分光(株)  
 中央大学OB法律研究会  
 カウンセリング研究会  
 経営21研究会  
 ■ 9月 (82グループ、延2555人)  
 東京学芸大学助教授  
 早稲田大学絵画会  
 津田塾大学英语会 Debate  
 学習院大学助教授  
 大妻女子大学教授  
 上智大学理工学部化学科  
 東京学芸大学教授  
 日本大学芸術学部長唄研究会  
 早稲田大学雄弁会  
 \* 青山学院大学教授  
 千葉大学教授  
 青山学院大学教授  
 日本大学陸上競技部  
 中央大学辞達学会  
 帝京大学雄弁会  
 東京女子大学教授  
 学習院大学大学院政治学研究所  
 東京都立大学学生自治会実行部  
 中央大学講師  
 岩尾 徹

林真一郎  
 駒澤大学教授  
 東京大学教授  
 埼玉大学教授  
 明治大学建築学科科学技術英語  
 明治学院大学グリーンリブス  
 東京工科大学教授  
 東洋英和女学院大学教授  
 大妻女子大学助教授  
 早稲田大学助教授  
 中央大学助教授  
 早稲田大学建築展  
 中央大学教授  
 日本大学雄弁会  
 東京学芸大学助教授  
 千葉大学炭焼きの会  
 青山学院大学グループ研修会  
 横浜国立大学留学生センター  
 東洋大学教授  
 桜美林大学講師  
 早稲田大学野焼き  
 青山学院大学助教授  
 東京大学助教授  
 青山学院大学助教授  
 横浜国立大学助教授  
 東京経済大学教授  
 金谷 憲  
 青山学院大学教授  
 青山学院大学教授  
 成蹊大学教授  
 一橋大学教授  
 明治大学教授  
 東京理科大学建築学科山名研究室  
 千葉大学教授  
 東京都立大学教授  
 東京都立大学教育学科  
 ルーテル学院大学講師  
 高山由美子  
 辻山ゆき子

坪井 健  
 近山 隆  
 相沢幸悦  
 上林憲行  
 吉岡良昌  
 久保田滋  
 飯嶋好彦  
 西 郷浩  
 田中拓男  
 南原一博  
 池田義人  
 横谷輝男  
 松原健太郎  
 白井邦彦  
 大門正克  
 藤沢房俊  
 外池滋生  
 嶋田順好  
 松浦義弘  
 土肥恒之  
 栗原 彬  
 嶋津 格  
 人見 剛

立教大学教授小西ゼミ  
 東京農業大学助教授  
 駒澤大学教授  
 東京学芸大学助教授  
 明星大学講師  
 学習院大学ドイツ語合宿  
 立教大学教授  
 東京都立大学留学生(金鳥工科大学)  
 明星大学通信教育部  
 第9回大学職員セミナー  
 東京都立科学技術大学教授 森 泰親  
 第32期十大学合同セミナー  
 東京都立八王子工業高等学校生徒会  
 南アジア研究会  
 哲学若手研究者フォーラム  
 東京都立成瀬高等学校茶道部  
 日本女子体育大学附属二階堂高等学校  
 電気化学会夏の学校  
 国立音楽大学学生公認団体音楽あそび  
 研究会むっく  
 森の詩の会  
 万国デフ・パブテラスト協会  
 ここもり・ヘミシンク  
 \* サンプルイ  
 日輪グループ

横湯園子  
 関根康正  
 バリー・ナトウシユ  
 村井良太  
 古谷誠章  
 仁科貞文  
 大久保武  
 谷敷正光  
 君塚仁彦  
 小貴 悟  
 李 鐘元  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学助教授  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

住澤博紀  
 早稲田大学SANEテニスクラブ  
 早稲田大学(Sake-Road)社会と労働  
 上田紀行  
 中央大学教育学サブゼミナール  
 佐藤康男  
 東京大学財政学研究会  
 東京工業大学村田研究室  
 一橋大学教授  
 古澤ゆう子  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学合唱団  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

入山 映  
 国際基督教大学デイベータインク部  
 埼玉大学教授  
 東京都立南多摩高等学校帰国生徒部  
 町田新体操クラブ  
 現代と経済  
 佼成学園高等学校  
 明海大学助教授  
 アジア教育史学会  
 \* 共立女子大学教授  
 生物物理若手の会  
 神奈川県立相模大野高等学校演劇部  
 八王子リトルリーグ野球協会  
 先住民族と平和セミナー  
 スリーアイワークショップ  
 学習サークルたんぽぽ会  
 山形大学工学部電気電子工学科中川研  
 究室  
 関東学院大学哲学研究会  
 専修大学名誉教授  
 東京造形大学教授  
 秀明大学助教授  
 マレーシア留学生  
 国立音楽大学フィガロ  
 栃木県立宇都宮高等学校  
 浅川小年少女合唱団  
 \* ガイヒーリージャパン  
 八王子なぎなた連盟  
 カウンセリング学習者のためのエンカ  
 ウンターグループ  
 東京神学大学公開夜間神学講座  
 国立音楽大学  
 八王子市立打越中学校ソフトテニス部  
 有志  
 帝国と思想研究会  
 明神フェニックスFC

和光大学助教授  
 福井大学  
 教諭セミナー  
 文学教育研究者集団  
 相模原キリスト教会  
 AITC  
 大久保集会  
 日輪グループ  
 日本山岳会科学委員会  
 東京都多摩教育事務所西多摩支所  
 (社)国際商事法研究所  
 聖書研究会  
 ここもり・ヘミシンク  
 授業研究会の会  
 東京韓国キリスト教会  
 日本分光(株)  
 中央大学OB法律研究会  
 カウンセリング研究会  
 経営21研究会  
 ■ 9月 (82グループ、延2555人)  
 東京学芸大学助教授  
 早稲田大学絵画会  
 津田塾大学英语会 Debate  
 学習院大学助教授  
 大妻女子大学教授  
 上智大学理工学部化学科  
 東京学芸大学教授  
 日本大学芸術学部長唄研究会  
 早稲田大学雄弁会  
 \* 青山学院大学教授  
 千葉大学教授  
 青山学院大学教授  
 日本大学陸上競技部  
 中央大学辞達学会  
 帝京大学雄弁会  
 東京女子大学教授  
 学習院大学大学院政治学研究所  
 東京都立大学学生自治会実行部  
 中央大学講師  
 岩尾 徹

林真一郎  
 駒澤大学教授  
 東京大学教授  
 埼玉大学教授  
 明治大学建築学科科学技術英語  
 明治学院大学グリーンリブス  
 東京工科大学教授  
 東洋英和女学院大学教授  
 大妻女子大学助教授  
 早稲田大学助教授  
 中央大学助教授  
 早稲田大学建築展  
 中央大学教授  
 日本大学雄弁会  
 東京学芸大学助教授  
 千葉大学炭焼きの会  
 青山学院大学グループ研修会  
 横浜国立大学留学生センター  
 東洋大学教授  
 桜美林大学講師  
 早稲田大学野焼き  
 青山学院大学助教授  
 東京大学助教授  
 青山学院大学助教授  
 横浜国立大学助教授  
 東京経済大学教授  
 金谷 憲  
 青山学院大学教授  
 青山学院大学教授  
 成蹊大学教授  
 一橋大学教授  
 明治大学教授  
 東京理科大学建築学科山名研究室  
 千葉大学教授  
 東京都立大学教授  
 東京都立大学教育学科  
 ルーテル学院大学講師  
 高山由美子  
 辻山ゆき子

坪井 健  
 近山 隆  
 相沢幸悦  
 上林憲行  
 吉岡良昌  
 久保田滋  
 飯嶋好彦  
 西 郷浩  
 田中拓男  
 南原一博  
 池田義人  
 横谷輝男  
 松原健太郎  
 白井邦彦  
 大門正克  
 藤沢房俊  
 外池滋生  
 嶋田順好  
 松浦義弘  
 土肥恒之  
 栗原 彬  
 嶋津 格  
 人見 剛

立教大学教授小西ゼミ  
 東京農業大学助教授  
 駒澤大学教授  
 東京学芸大学助教授  
 明星大学講師  
 学習院大学ドイツ語合宿  
 立教大学教授  
 東京都立大学留学生(金鳥工科大学)  
 明星大学通信教育部  
 第9回大学職員セミナー  
 東京都立科学技術大学教授 森 泰親  
 第32期十大学合同セミナー  
 東京都立八王子工業高等学校生徒会  
 南アジア研究会  
 哲学若手研究者フォーラム  
 東京都立成瀬高等学校茶道部  
 日本女子体育大学附属二階堂高等学校  
 電気化学会夏の学校  
 国立音楽大学学生公認団体音楽あそび  
 研究会むっく  
 森の詩の会  
 万国デフ・パブテラスト協会  
 ここもり・ヘミシンク  
 \* サンプルイ  
 日輪グループ

横湯園子  
 関根康正  
 バリー・ナトウシユ  
 村井良太  
 古谷誠章  
 仁科貞文  
 大久保武  
 谷敷正光  
 君塚仁彦  
 小貴 悟  
 李 鐘元  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学助教授  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

住澤博紀  
 早稲田大学SANEテニスクラブ  
 早稲田大学(Sake-Road)社会と労働  
 上田紀行  
 中央大学教育学サブゼミナール  
 佐藤康男  
 東京大学財政学研究会  
 東京工業大学村田研究室  
 一橋大学教授  
 古澤ゆう子  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学合唱団  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

入山 映  
 国際基督教大学デイベータインク部  
 埼玉大学教授  
 東京都立南多摩高等学校帰国生徒部  
 町田新体操クラブ  
 現代と経済  
 佼成学園高等学校  
 明海大学助教授  
 アジア教育史学会  
 \* 共立女子大学教授  
 生物物理若手の会  
 神奈川県立相模大野高等学校演劇部  
 八王子リトルリーグ野球協会  
 先住民族と平和セミナー  
 スリーアイワークショップ  
 学習サークルたんぽぽ会  
 山形大学工学部電気電子工学科中川研  
 究室  
 関東学院大学哲学研究会  
 専修大学名誉教授  
 東京造形大学教授  
 秀明大学助教授  
 マレーシア留学生  
 国立音楽大学フィガロ  
 栃木県立宇都宮高等学校  
 浅川小年少女合唱団  
 \* ガイヒーリージャパン  
 八王子なぎなた連盟  
 カウンセリング学習者のためのエンカ  
 ウンターグループ  
 東京神学大学公開夜間神学講座  
 国立音楽大学  
 八王子市立打越中学校ソフトテニス部  
 有志  
 帝国と思想研究会  
 明神フェニックスFC

和光大学助教授  
 福井大学  
 教諭セミナー  
 文学教育研究者集団  
 相模原キリスト教会  
 AITC  
 大久保集会  
 日輪グループ  
 日本山岳会科学委員会  
 東京都多摩教育事務所西多摩支所  
 (社)国際商事法研究所  
 聖書研究会  
 ここもり・ヘミシンク  
 授業研究会の会  
 東京韓国キリスト教会  
 日本分光(株)  
 中央大学OB法律研究会  
 カウンセリング研究会  
 経営21研究会  
 ■ 9月 (82グループ、延2555人)  
 東京学芸大学助教授  
 早稲田大学絵画会  
 津田塾大学英语会 Debate  
 学習院大学助教授  
 大妻女子大学教授  
 上智大学理工学部化学科  
 東京学芸大学教授  
 日本大学芸術学部長唄研究会  
 早稲田大学雄弁会  
 \* 青山学院大学教授  
 千葉大学教授  
 青山学院大学教授  
 日本大学陸上競技部  
 中央大学辞達学会  
 帝京大学雄弁会  
 東京女子大学教授  
 学習院大学大学院政治学研究所  
 東京都立大学学生自治会実行部  
 中央大学講師  
 岩尾 徹

林真一郎  
 駒澤大学教授  
 東京大学教授  
 埼玉大学教授  
 明治大学建築学科科学技術英語  
 明治学院大学グリーンリブス  
 東京工科大学教授  
 東洋英和女学院大学教授  
 大妻女子大学助教授  
 早稲田大学助教授  
 中央大学助教授  
 早稲田大学建築展  
 中央大学教授  
 日本大学雄弁会  
 東京学芸大学助教授  
 千葉大学炭焼きの会  
 青山学院大学グループ研修会  
 横浜国立大学留学生センター  
 東洋大学教授  
 桜美林大学講師  
 早稲田大学野焼き  
 青山学院大学助教授  
 東京大学助教授  
 青山学院大学助教授  
 横浜国立大学助教授  
 東京経済大学教授  
 金谷 憲  
 青山学院大学教授  
 青山学院大学教授  
 成蹊大学教授  
 一橋大学教授  
 明治大学教授  
 東京理科大学建築学科山名研究室  
 千葉大学教授  
 東京都立大学教授  
 東京都立大学教育学科  
 ルーテル学院大学講師  
 高山由美子  
 辻山ゆき子

坪井 健  
 近山 隆  
 相沢幸悦  
 上林憲行  
 吉岡良昌  
 久保田滋  
 飯嶋好彦  
 西 郷浩  
 田中拓男  
 南原一博  
 池田義人  
 横谷輝男  
 松原健太郎  
 白井邦彦  
 大門正克  
 藤沢房俊  
 外池滋生  
 嶋田順好  
 松浦義弘  
 土肥恒之  
 栗原 彬  
 嶋津 格  
 人見 剛

立教大学教授小西ゼミ  
 東京農業大学助教授  
 駒澤大学教授  
 東京学芸大学助教授  
 明星大学講師  
 学習院大学ドイツ語合宿  
 立教大学教授  
 東京都立大学留学生(金鳥工科大学)  
 明星大学通信教育部  
 第9回大学職員セミナー  
 東京都立科学技術大学教授 森 泰親  
 第32期十大学合同セミナー  
 東京都立八王子工業高等学校生徒会  
 南アジア研究会  
 哲学若手研究者フォーラム  
 東京都立成瀬高等学校茶道部  
 日本女子体育大学附属二階堂高等学校  
 電気化学会夏の学校  
 国立音楽大学学生公認団体音楽あそび  
 研究会むっく  
 森の詩の会  
 万国デフ・パブテラスト協会  
 ここもり・ヘミシンク  
 \* サンプルイ  
 日輪グループ

横湯園子  
 関根康正  
 バリー・ナトウシユ  
 村井良太  
 古谷誠章  
 仁科貞文  
 大久保武  
 谷敷正光  
 君塚仁彦  
 小貴 悟  
 李 鐘元  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学助教授  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

住澤博紀  
 早稲田大学SANEテニスクラブ  
 早稲田大学(Sake-Road)社会と労働  
 上田紀行  
 中央大学教育学サブゼミナール  
 佐藤康男  
 東京大学財政学研究会  
 東京工業大学村田研究室  
 一橋大学教授  
 古澤ゆう子  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学合唱団  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

入山 映  
 国際基督教大学デイベータインク部  
 埼玉大学教授  
 東京都立南多摩高等学校帰国生徒部  
 町田新体操クラブ  
 現代と経済  
 佼成学園高等学校  
 明海大学助教授  
 アジア教育史学会  
 \* 共立女子大学教授  
 生物物理若手の会  
 神奈川県立相模大野高等学校演劇部  
 八王子リトルリーグ野球協会  
 先住民族と平和セミナー  
 スリーアイワークショップ  
 学習サークルたんぽぽ会  
 山形大学工学部電気電子工学科中川研  
 究室  
 関東学院大学哲学研究会  
 専修大学名誉教授  
 東京造形大学教授  
 秀明大学助教授  
 マレーシア留学生  
 国立音楽大学フィガロ  
 栃木県立宇都宮高等学校  
 浅川小年少女合唱団  
 \* ガイヒーリージャパン  
 八王子なぎなた連盟  
 カウンセリング学習者のためのエンカ  
 ウンターグループ  
 東京神学大学公開夜間神学講座  
 国立音楽大学  
 八王子市立打越中学校ソフトテニス部  
 有志  
 帝国と思想研究会  
 明神フェニックスFC

和光大学助教授  
 福井大学  
 教諭セミナー  
 文学教育研究者集団  
 相模原キリスト教会  
 AITC  
 大久保集会  
 日輪グループ  
 日本山岳会科学委員会  
 東京都多摩教育事務所西多摩支所  
 (社)国際商事法研究所  
 聖書研究会  
 ここもり・ヘミシンク  
 授業研究会の会  
 東京韓国キリスト教会  
 日本分光(株)  
 中央大学OB法律研究会  
 カウンセリング研究会  
 経営21研究会  
 ■ 9月 (82グループ、延2555人)  
 東京学芸大学助教授  
 早稲田大学絵画会  
 津田塾大学英语会 Debate  
 学習院大学助教授  
 大妻女子大学教授  
 上智大学理工学部化学科  
 東京学芸大学教授  
 日本大学芸術学部長唄研究会  
 早稲田大学雄弁会  
 \* 青山学院大学教授  
 千葉大学教授  
 青山学院大学教授  
 日本大学陸上競技部  
 中央大学辞達学会  
 帝京大学雄弁会  
 東京女子大学教授  
 学習院大学大学院政治学研究所  
 東京都立大学学生自治会実行部  
 中央大学講師  
 岩尾 徹

林真一郎  
 駒澤大学教授  
 東京大学教授  
 埼玉大学教授  
 明治大学建築学科科学技術英語  
 明治学院大学グリーンリブス  
 東京工科大学教授  
 東洋英和女学院大学教授  
 大妻女子大学助教授  
 早稲田大学助教授  
 中央大学助教授  
 早稲田大学建築展  
 中央大学教授  
 日本大学雄弁会  
 東京学芸大学助教授  
 千葉大学炭焼きの会  
 青山学院大学グループ研修会  
 横浜国立大学留学生センター  
 東洋大学教授  
 桜美林大学講師  
 早稲田大学野焼き  
 青山学院大学助教授  
 東京大学助教授  
 青山学院大学助教授  
 横浜国立大学助教授  
 東京経済大学教授  
 金谷 憲  
 青山学院大学教授  
 青山学院大学教授  
 成蹊大学教授  
 一橋大学教授  
 明治大学教授  
 東京理科大学建築学科山名研究室  
 千葉大学教授  
 東京都立大学教授  
 東京都立大学教育学科  
 ルーテル学院大学講師  
 高山由美子  
 辻山ゆき子

坪井 健  
 近山 隆  
 相沢幸悦  
 上林憲行  
 吉岡良昌  
 久保田滋  
 飯嶋好彦  
 西 郷浩  
 田中拓男  
 南原一博  
 池田義人  
 横谷輝男  
 松原健太郎  
 白井邦彦  
 大門正克  
 藤沢房俊  
 外池滋生  
 嶋田順好  
 松浦義弘  
 土肥恒之  
 栗原 彬  
 嶋津 格  
 人見 剛

立教大学教授小西ゼミ  
 東京農業大学助教授  
 駒澤大学教授  
 東京学芸大学助教授  
 明星大学講師  
 学習院大学ドイツ語合宿  
 立教大学教授  
 東京都立大学留学生(金鳥工科大学)  
 明星大学通信教育部  
 第9回大学職員セミナー  
 東京都立科学技術大学教授 森 泰親  
 第32期十大学合同セミナー  
 東京都立八王子工業高等学校生徒会  
 南アジア研究会  
 哲学若手研究者フォーラム  
 東京都立成瀬高等学校茶道部  
 日本女子体育大学附属二階堂高等学校  
 電気化学会夏の学校  
 国立音楽大学学生公認団体音楽あそび  
 研究会むっく  
 森の詩の会  
 万国デフ・パブテラスト協会  
 ここもり・ヘミシンク  
 \* サンプルイ  
 日輪グループ

横湯園子  
 関根康正  
 バリー・ナトウシユ  
 村井良太  
 古谷誠章  
 仁科貞文  
 大久保武  
 谷敷正光  
 君塚仁彦  
 小貴 悟  
 李 鐘元  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学助教授  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

住澤博紀  
 早稲田大学SANEテニスクラブ  
 早稲田大学(Sake-Road)社会と労働  
 上田紀行  
 中央大学教育学サブゼミナール  
 佐藤康男  
 東京大学財政学研究会  
 東京工業大学村田研究室  
 一橋大学教授  
 古澤ゆう子  
 東京理科大学大澤ゼミ  
 東京都立大学教授  
 東京理科大学教授  
 早稲田大学合唱団  
 明治大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 武蔵工業大学環境情報エコワークス  
 恵泉女学園大学助教授  
 警南総合研究会  
 \* 電気通信大学教授  
 一橋大学教授  
 法政大学講師  
 埼玉大学教授  
 明星大学通信教育部  
 中央大学通信教育部  
 桜美林大学講師  
 慶應義塾大学教授  
 武蔵工業大学助教授  
 女子美術大学付属高等学校・中学校

入山 映  
 国際基督教大学デイベータインク部  
 埼玉大学教授  
 東京都立南多摩高等学校帰国生徒部  
 町田新体操クラブ  
 現代と経済  
 佼成学園高等学校  
 明海大学助教授  
 アジア教育史学会  
 \* 共立女子大学教授  
 生物物理若手の会  
 神奈川県立相模大野高等学校演劇部  
 八王子リトルリーグ野球協会  
 先住民族と平和セミナー  
 スリーアイワークショップ  
 学習サークルたんぽぽ会  
 山形大学工学部電気電子工学科中川研  
 究室  
 関東学院大学哲学研究会  
 専修大学名誉教授  
 東京造形大学教授  
 秀明大学助教授  
 マレーシア留学生  
 国立音楽大学フィガロ  
 栃木県立宇都宮高等学校  
 浅川小年少女合唱団  
 \* ガイヒーリージャパン  
 八王子なぎなた連盟  
 カウンセリング学習者のためのエンカ  
 ウンターグループ  
 東京神学大学公開夜間神学講座  
 国立音楽大学  
 八王子市立打越中学校ソフトテニス部  
 有志  
 帝国と思想研究会  
 明神フェニックスFC



## 留学生会館建設にご支援を 開館40周年記念募金をお願い

皆様方のお力添えを賜っております当大学セミナー・ハウスは、昭和37（1962）年3月に財団法人としての設立が認可され、3年後の昭和40（1965）年7月に開館しました。平成17（2005）年7月には開館40周年を迎えますが、これを契機に留学生支援事業を立案いたしました。

わが国で学ぶ留学生は、10万人を超えましたが、そのうち公的宿舎への入居留学生数は約25,000人で、うち国・公・私立大学の留学生宿舎には約14,500人（全体の約15%）が入居しているに過ぎません。多摩地区の各大学でもますます留学生数が増加する傾向にあり、良質で低廉な宿舎を確保することは重要な課題となっております。

当ハウスでも、これまで日米・日韓などの学生レベルの国際交流集会や来日留学生・研究者のための日本研究プログラム、最近ではマレーシア留学生の長期滞在など各種の国際的な研修を受け入れてまいりました。こうした経験を踏まえつつ、留学生を支援する施設を建設し、当ハウスを利用する方はもちろんのこと、地域住民との日常的な国際交流の場を提供してまいりたいと存じます。

今日の厳しい経済状況につきましては承知しておりますが、前回の募金趣旨をより具体化し、継承する今回の事業計画にご理解賜り、何卒格別のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

- 募金目標：200,000千円
- 募金口数：個人一口5,000円・法人一口50,000円
- 募集期間：2003年7月1日から2005年6月30日
- 払込方法：郵便局または取扱銀行よりお振込ください。
- 免税措置：ご寄付は「特定公益増進法人」に対する寄付金として税金優遇措置が受けられます。

募金に関するお問合せ：総務施設課 TEL：0426-76-8511 FAX：0426-76-1220  
E-mail：info@seminarhouse.or.jp

## 開館40周年記念募金第7回報告

◆募金総額三一、九二一、四五三円  
(2005年2月28日現在)

千人会員、利用者、主催セミナーの講師の皆様、企業及び各種団体から多大なご寄付をいただき、平成17年2月28日現在で三一、九二一、四三三円となりまして、ここに感謝をこめて、本紙第167号掲載以降の申込者の御芳名を記載させていただきます。

◆募金申込者ご芳名（入金順）  
(2004年7月1日～2005年2月28日)

|            |               |
|------------|---------------|
| 一〇、〇〇〇円    | 小松親次郎殿        |
| 一〇、〇〇〇円    | 古矢鉄矢殿         |
| 五、〇〇〇円     | 磯貝 健殿         |
| 五、〇〇〇円     | 青澤 博殿         |
| 一〇、〇〇〇円    | 中村正一殿         |
| 五、〇〇〇円     | 安藤賢一殿         |
| 一〇、〇〇〇円    | 吉田美穂子殿        |
| 一〇、〇〇〇円    | 長谷川瑞穂殿        |
| 一〇、〇〇〇円    | 小沢洋子殿・水野恵子殿   |
| 一〇、〇〇〇円    | おさひめ幼稚園殿      |
| 五、〇〇〇円     | 赤城多衣子殿        |
| 三六、〇〇〇円    | 佐藤東洋士殿        |
| 一〇、〇〇〇円    | 井上嘉大殿         |
| 一〇、〇〇〇円    | 亀 節子殿         |
| 一〇、〇〇〇円    | 渡辺和仁殿         |
| 五、〇〇〇円     | 佐々木晋吾殿        |
| 三〇、〇〇〇円    | ニューレジストン株式会社殿 |
| 五〇、〇〇〇円    | 村上 健殿         |
| 二〇〇、〇〇〇円   | セイコーエプソン株式会社殿 |
| 一〇、〇〇〇円    | 森 章殿          |
| 五、〇〇〇円     | 保坂揚子殿         |
| 二、〇〇〇、〇〇〇円 | 松下電器産業株式会社殿   |
| 五〇、〇〇〇円    | 日下公人殿         |
| 一〇、〇〇〇円    | 天野郁夫殿         |
| 一一、六二六円    | 募金箱寄付金        |
| 三〇、二四〇円    | 中嶋嶺雄殿         |
| 以上         |               |

### ◆館長室から◆

## 聞鶏起舞

今年は何年である。「酉」は十二支の十番目で、西の方角を表わす。「酉」という字は干支の場合にしか使われない。「酉」を構成部分とする漢字には、酒、酪、酎、酔、酌、酎、酖、酩、醒、醜、釀、・・・など「酒」に係あるものが多い。それもそのはず、「酉」は酒を造る壺の形から作られた象形文字らしい。

「鶏」は中国語でも「ニワトリ」を意味するが、「田鶏」は「クイナ」転じて「カエル」、「草鶏」は「めんどり」転じて「弱虫」を意味する。

『晋書』祖逖伝に拠れば、祖逖と劉昆は、晋王朝を復興し平和な世の中を作ることを夢見ていた。二人はその夢のためにあらゆる努力を惜しまず、毎日鶏の鳴き声を聞いて起き、剣舞を練習した。長い間の努力が実って、祖逖は鎮西將軍に任じられ、劉昆は都督に任じられた。後の人々は、二人の絶えざる努力に感動し、目標のために奮励努力することを「聞鶏起舞」と言うようになった。

酉年に因んで「聞鶏起舞」を座右の銘としよう。目標はセミナーハウスの再建である。  
(荻上紘一)